呪われたもの

ありま氷炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪われたもの

【Ｎコード】

Ｎ７５９６Ｘ

【作者名】

ありま氷炎

【あらすじ】

女性呪術師の藍（ラン）は２年ぶりに師匠で呪術司の典（テン）を助けるため、宮に戻る。典（テン）と帝は救ったものの自分自身に呪いがかかり、絶世の美女になってしまう。美女から元の姿に戻るため、藍（ラン）は強（キョウ）と共に東の緑森国へ向かう…帝を狙う陰謀にも巻き込まれ藍（ラン）は元の姿に戻ることはできるのか？

気まぐれ連載です。ブログと同時更新。

二年ぶりに宮へ

「はあ…」
呪術師・藍（ラン）は本日何度目かのため息をついた。

決めたことだ。
呪術部――宮（みや）を出る。

呪術部で会得できる技術はすべて習得していた。
この場所にもう、未練はない。

藍は十五歳のときにその腕を見込まれ、宮にある呪術部に招聘された。それは帝を外敵から守り、国の運営に力を貸すことでできる有能な呪術師に育てるためであった。
呪術とは自らの気を操り、相手を呪いかけるものであり、物理的に攻撃することもできる戦闘にも長ける術だった。
宮の呪術部は数年に一度このような招聘を行っており、宮に集められた呪術師は二、三年にかけ呪術部で修行を積む。そして宮の呪術師として華麗な道を歩むのが決まりであった。
しかし藍は三年目の今日、宮から出ようとしていた。

藍は小柄な可愛らしい女性であった。その茶色の真っ直ぐに伸びた髪はいつも後ろで結ばれ、海のように青い瞳には意志の強そうな光が宿っている。着ている物は他の女性のように明るい配色の着物ではなく、黒や紺といった地味な色であった。このため、藍の印象は華やかな呪術部の中では薄い方だった。

「やっぱり行くのかい？」
呪術司の典（テン）は、大きな布袋を背中に背負って部屋を出て行こうと

する藍にそう声をかけた。
藍はまさか典がそこにいるとは思わず、驚いて彼を見つめる。
典は呪術部をつかさどる呪術司で、藍の師匠だった。宮の美しき呪術司と呼ばれており、整った卵型の顔に透き通るような緑色の瞳、見るものにため息をつかせるほどの美しい金色の髪は無造作に肩にかかるまで伸ばされていた。
藍は典の下で三年修行を積んだ。その優しげな容貌とは裏腹に、指導は厳しく、三年の間に集められた呪術師で残ったのはたった五人だった。

呪術の世界に浸るのは楽しかったが、藍は宮の生活にどうしても馴染めなかった。
帝を呪いから守るのが呪術部の呪術師の主な仕事であったが、帝の元に集うものたちが己の欲望のために、呪術師に個人的な呪いを頼む事も多かった。宮の呪術師という立場上、断ることもできず、藍は日々いやいやながら依頼を受けていた。
藍は「表」の顔を着飾り、清らかな心しか持たないように振舞う宮の人々が嫌いだった。三年間我慢してきたが、藍は今日という今日は宮を出ることを決めていた。

「すみません。田舎ものの私にはやはり宮の生活はむずかしいです」
藍はぺこりと頭を下げると、扉に寄りかかったまま微笑を浮かべる典の前を通りすぎようとした。
「藍！」
典はそう名を呼ぶと藍の腕をつかんだ。
「君がいなくなると仕事量が半端になく増えるんだ。いてくれないか？」
緑色の瞳は藍を捉えるとそう懇願した。
「……典様。部には私以外にも明様（ミン）やたくさんの呪術師がいます。心配しなくても」

弟子のつれない答えに典はため息をもらす。
「君くらいの能力じゃないから、役にたたない」
役にたたないって。
あいかわらず容赦ない言葉だと思いながら、藍は美しい師の顔を見つめ返す。
「……典様。それを言ったら明様が怒りますよ」
すると典は苦笑する。
「正直なことをいったまでだ。私はただ美しいだけものよりも、能力のある者が側にいたほうがいい」
すみませんね。美しくなくて。
でも、美しいだけって、明様が聞いたら泣きますよ。
「藍。お願いだ。行かないでくれ」
まったく、愛の告白みたいだ。
でもその手には乗りません。
藍には典が必要としているのが、自分の呪術師としての力だけだということを、充分にわかっていた。
典が誰かを好きになったり、いれこんだりするところなどを見たことがなかった。
最初はその言葉に期待して、宮を出ていくのをやめたこともあったが、五回目となる今日はもう騙されるつもりはなかった。
「典様。がんばってください。私がいなくなればみんなちゃんと仕

事をしますよ。きっと。だから大丈夫です。田舎から応援してますから」
呪術司に言う言葉じゃないと思いながらも、藍は笑顔を作り、つかまれた手を振り払う。
「藍！」
「典様、お元気で～」
藍は師に背を向け、ひらひらと手を振ると呪術部の建物を出て行った。
「藍！」

「はい！」
そう勢いよく返事した自分の声で藍は目を覚ました。そして自分が森の中で寝てしまったことに気づく。
宮から帰ってきて二年ほどたっていた。
「夢ぇ？」
村に帰ってきて初めてみた宮での夢だった。
「まさか、なんか典様にあったのかな？まさか、あの典様が…」
藍は師から夢が何かを暗示することもあると言われた言葉を思い出す。

でもまさかな…
無敵を誇る呪術司が危機に陥るなんて、ありえない話だ。
気のせいだ…
きっと…

「さあ、仕事、仕事！母さんに怒られる！」
藍は嫌な予感を振り払うように首を横に振ると、うーんと背伸びをする。そして店に戻るために、気合をいれ勢いよく立ち上がった。

宮から村に帰ってから、藍は両親が経営する呪術店を手伝っていた。さすが宮帰りの実力者ということでその噂は広まり、両親がほそぼそとやっていた店はたちまち人気の店になった。店に押しかけるのは呪いを解いてほしい人や、呪いを防ぐ護身具を求める者たちだった。

「藍、あんたどこいってたの～」

店の扉を開けに入ったとたん、母親がそう声をかけてきた。

「どこって…」

藍は返事を返そうと顔を上げ、自分の前に立ちふさがる男を見て目を疑った。

「……強様（キョウ）？！」

それは宮で警備兵をしていた強だった。強は典の親友でよく呪術部に姿を現していた。そのため、顔と姿は記憶していた。

強の姿は二年前と変わっていなかった。違うところといえば、鎧を着ていないことくらいだった。外出用の紫の着物を羽織り、褐色の肌に茶色の瞳、後ろの方でまとめた長い黒髪は藍の母でなくともうっとりするような男前であった。

「藍。お前、やっぱりこの人知り合いなのかい？店で待たせてくれと言われて、どうしたものかと思ってたんだけど」

藍の母はそう言いながら、驚いた顔をしている娘と、渋い顔をして店の真ん中に立つ男前を見比べる。男の話に半信半疑の母親だったが戻ってきた娘の様子を見て納得したようだ。

「藍殿。久しいな。だかすまない。挨拶してる時間がないんだ。典が…呪術司が呼んでる。緊急だ。悪いが一緒に来てくれ」

「……緊急って？」

強の切羽詰った顔を見て、藍は自分の心臓が跳ね上がるのがわかった。そして先程見た夢を思いだす。

やっぱり典様に何かあったんだ。

「今は言えない。とりあえず一緒にきてくれ」

その言葉に藍は仕方なくうなずき、彼とともに宮に向かうことになった。

かけられた呪い

黒の大陸は世界の中心に位置する大陸だった。宮京を中心とするその大陸を支配するのは黒髪に黒い瞳、真っ白な肌をもつ黒族。黒族は宮京を中心に四つの国を配下におき、数百年に及び黒の大陸を支配していた。

四つの国は、北の紅花国（くかこく）、東の緑森国（りょくしんこく）、西の碧雲国（へきうんこく）、南の黄土国（おうどこく）であり、呪術師・藍（ラン）は北の紅花国（くかこく）出身で宮から戻った後、二年間のんびりと暮していた。

「典（テン）様の結界を破る呪い？」

「そうだ。典は今その力を使い、呪いをぎりぎりで止めている。あいつがあんなに余裕のない顔をしたのは初めてみた」

余裕のない顔…

たしかに典様はいつも余裕たっぷりだもんな。

頭に来るくらい…

いっそ、このままほっといたほうが面白いかもしれない。

藍はふとそんなことを思ったが、強（キョウ）の生真面目な表情を見てやめた。

「でもなんで私なんですか？」

強の背中に掴まりながら、藍がそう尋ねる。二人は馬に乗って、宮京に向かっていた。

「他の者じゃ対処できなかった。典はもう君以外に頼めるものがいないと言っていた」

強は手綱をつかみ、馬を走らせながらそう淡々と答える。

私が最後の希望か…

呪い返し、典と共に何度かやったことがあった。
典が呪いを結界で食い止めてる間に、その気を消滅させる。

確かに他の者ではむずかしいかもしれなかった。

「でも最近、呪い返しの大きい奴はしてないんですけど…」
「悪いが君に選択肢はない。典だけでなく、帝の命もかかっているのだ」

帝の命…
それはそれで大変だわ。

典様ひとりじゃ、ちょっとくらい苦しんでもよさそうだけど。
このまま、馬でちんたらいけば、あと2刻はかかるかもしれない。

でも飛んでいけば。

「強様、飛んでいきましょう！」
「！？」
強はぎくっと肩を震わせると馬を止めた。
藍は馬からぽんと降りると、馬の上の男前の警備隊長を見上げる。
「馬で宮に向かえば、二刻かかります。飛んでいけば半刻でつくと思いますよ」
「…そうか。そうだな」
男前は少し顔を強張らせ、ゆっくりと馬から降りた。
強は正直、飛んだことがなかった。まあ、飛ぶなんてこと呪術師以外に経験をすることがないのだが、高所恐怖症の強にとって飛ぶことなんで考えたくないことだった。

「強様とあるものが怖いんですか？」

まさかね？

藍は警備隊長の顔が曇ったことにそんな予感を覚えた。

でもまさか、天下の警備隊長がありえないよね？

「…そんなことはない」

強は藍にそう憮然として答える。自分の弱みを見られたくないため、その表情がすこし怒っているようにも見える。

「じゃ、手を貸して下さい。馬はすみません。あきらめてください」

藍の意志の強そうな青い瞳を向けられ、強は仕方なく手を差し出す。藍は手を掴むと何も言わず飛び上がった。

「？！」

浮遊感が体を包み、強は自分の顔が青ざめるのがわかった。

「怖がらないでください」

「怖くなどない」

藍は怯える警備隊長の答えに思わず笑みを浮かべる。

「何がおかしい？」

「いや、別に…。さ、強様、飛ばしますよ。典様（テン）といえ、早くしないと大変なことになりますから」

「典、大丈夫か？」

帝は寝室から体を起こし心配気に、自分の身を守る呪術司を見上げる。

「大丈夫です」

典は脂汗をかきながらそう答えた。

実際のところ大丈夫ではなかった。辛うじて帝に呪いが届く前に止めることができたが、呪いが意外に強力で弾き飛ばすことができなかった。
呪術部から何名かの呪術者が来たが、典の助けになることはなかった。

そこで浮かんだのが、二年前に宮を出て行った藍だった。

可愛らしい女性でその姿に似合わず、甘えのないその気は典を唸らせることもよくあった。
宮を出るというのを何度もひきとめたが、とうとう2年前に出て行ってしまった。
この2年大きな呪いが宮を襲うことはなく、典は弟子の藍の助けを必要としなかった。
しかし、今回はどうしても藍の助けが必要そうだった。

親友の強に頼み、藍を連れて来るように言って三刻が立とうとしていた。

体がきしみ始め、呪いを弾く結界が崩れ始めようとしていた。

まずいな…

帝に不安を与えないように笑顔を作りながら、内心、典は焦っていた。

「典様！」
ひさびさに聞いた元気な弟子の声に典はほっとする。
「何者だ！」

窓からふいに入ってきた茶色の髪の女性を見て声を荒げた警備兵だが、側に隊長の姿を確認し構えた刀を降ろす。
「藍、来てくれたんだ。ありがとう」
「どういたしまして」
藍はぺこりと師に頭を下げた後、奥にいる男に気づいた。
黒髪に黒い瞳、真っ白の肌の華奢な男がベッドの上に座っていた。
その場所、色彩から帝であることがわかる。
寝室には帝と典のほか、数人の警備兵がいた。一緒にきた強は船酔いではなく、飛び酔いになったようで、顔色を悪くし、警備兵と共に壁に控えている。
「帝様、紅花国(くかこく)の藍です」
藍はとりあえず師の横から顔を出し、寝台の帝に対し頭を垂れる。
「ごくろうである。宮から出たというのにすまないな」
帝は藍を見ると微笑みを浮かべた。
「そんなこと、恐れ多いです」
帝にそう言われ藍はふかぶかと頭を下げた。

帝さんって悪い人じゃなさそうだ。
ま、悪かったら国が滅んでるか。

藍がそんなことを考えていると声がかかった。
「藍。悪いけど、呪いを先に返して貰ってもいいかい？」
「そうでしたね。じゃあやります」
藍は帝に再度頭を下げると、長時間の呪い封じのため疲れをみせる師に視線を向けた。その手に真っ黒は気が絡みついている。
「かなり強力そうですね」
「それはそうだ。この私がはじけ飛ばせないんだから」
「そうですね」
やっぱり偉そうな人だなと思いながら、藍は心を落ちつける。
そして手の平に気を貯め始める。

「いきます！」
気をためたところでそう声をかけ、その黒い気に自分の気をぶつける。
衝撃音がし、光が弾ける。
典は黒い気から解放され、ほっとその場に座り込む。
しかし、煙から現れた藍の姿をみて、目を見開いた。
「……藍。残念ながら君に呪いがかかったようだ」
典の言葉と視線に、藍は自分の姿を確認する。そして、自分が別の姿、別の女性になっていることに気づいた。

「え？元に戻る方法？どうして？」
美しき呪術司はにこにこっと笑って、そう聞いた。
呪いを弾き、帝の安全がわかってから、典は再度結界を張り直した。そして藍を連れ呪術部の呪術司部屋に戻ってきていた。
「どうしてって、こんな姿で村に帰れないですよ。戻す方法教えてください！」
「……いや。ご両親も喜ぶと思うよ。今なら国で一番の美女だと思うけど」
「！！」
藍は師をギロリと睨みつける。
典の言葉通り、変化した姿は、それはそれは美しい女性体だった。
青い瞳に波打つ金色の髪の毛、そして美しい肢体…

宮内を歩いて、呪術部に戻る途中、振り返らない者はいなかった。
そう確かに、国一番の美女かもしれない。
今なら…
でも、私はそんなものに興味はない。
鼻が低くても、目が小さくても、胸がなくても、前の姿の方がよかった。
「戻る方法教えてください！教えないと典様、私が全身全霊をかけて呪いますよ！」
美しくなってしまった弟子の言葉に典の顔が引きつる。
通常他人に自分の名前の書体を教えてはいけない。
呪いに使われる可能性があるからだ。
しかし、典の名前の書体はあることがきっかけで藍にばれていた。
「…しょうがないな。いいよ。教えてあげよう。多分この呪いは東の呪術師・賢（ケン）の仕業だ。あいつがしそうなことだ。多分私が防ぐと思って、かけてきたのだろう」
「北の呪術師賢…。その人に会えば、呪いを解いてもらえるんですね！」
「多分ね」
「多分ってなんですか！」
「彼は気まぐれだからね。もしかしたら代償を取られるかもしれない」
「代償？」
「一晩お付き合いするとか…」
「！嫌です！典様、一緒に行って頼んでください。お願いします！」

「だめだ。私は宮を出れない。あー強を連れていくといい。あいつならなんとか賢に頼めるかもしれない」
「強様？」
「そう」

いざ、東の緑森国へ

「飛んでいきますよ」
「飛ぶのか？」
「怖いんですか？」
「怖くなどない」
顔を引きつらせてそう言う強（キョウ）に、藍（ラン）は微笑みかけ手を差し出す。
強が空を飛ぶことが苦手なのはわかっていた。しかし、一刻もはやく元の姿に戻りたい藍は馬より、空を飛んでいくとことを選んだ。
「強様？」
なかなか手を握り返さない強に藍が首をかしげる。
すると強の顔がすこし赤らんだ気がした。

強様も男だもんね。

藍は以前の姿であればけしてありえない状況に心の中でため息をつく。
呪いにかかって数刻、絶世の美女になった藍への人々の態度は一気に変わった。男達はこぞって話しかけてきて、女性は遠巻きに藍を見ていた。
以前であれば用事がないかぎり、男性が藍に話しかけてくるなどありえなかった。女性は藍が自分たちの敵ではないと安心しているのか敵意のある視線でみることもなく、普通に話しかけてきていた。
まったく、たかが外見が変わっただけなのに。
絶対に早く元にもどってやる！

「ほらほら、強。見とれてないで」
藍がそう強い決心を固めていると、典（テン）がニヤニヤと2人を見比べ

てそう声をかけた。
「見とれてなどいない」
強は親友の言葉にむっとして答える。
「はは。ま、強。とりあえず、中身は藍だから。襲ったらだめだよ」
「中身って！？」
「襲うだと？！なんてことを！」
「はいはい。そう図星だからって怒らない。急ぐんだよね？」

図星って、
中身って、
やっぱり典様は口が悪すぎだ。
元の姿に戻ったら速攻、村に戻ってやる。

「そうです。急ぎますよ。強様行きますよ！」
藍はぎろりと典を睨みつけると強の手を掴む。そして一気に空に飛び上がった。
「藍殿？！」
強は突然、足場を失い、妙な浮遊感を感じて恐怖心で顔を歪める。思わず藍の腕を掴みたくなったが、それをどうにか男の沽券にかけて堪えた。
「強～。一応私の弟子だから、むらむらときても襲わないように」
「典！なんてことを言うんだ。お前は！」
「典様、言葉が過ぎますよ！」

なんてことを言うんだ。まったく。

二人は眼下に小さく見える典に鋭い視線を投げかける。
「はは。冗談だって。二人とも冗談通じないのかい？とりあえず気をつけていってらっしゃい」
「ああ」

「はい」
色々言いたいことはあったが、二人はにこにこと笑顔を浮かべて手を振る典に、そう返事をするだけに留まった。
「じゃ、行きますよ！」
藍は強にそう声をかけるとその手を強く握る。
そして国一番の美女になった藍は強を連れ、東の呪術師・賢（ケン）のいる緑森国に向かって飛んだ。

「強様、大丈夫ですか？」
緑森国（りょくしんこく）に着き、地面に降り立つと強の顔は真っ青になっていた。
無敵の戦士といわれる強のそんな弱点をみて、藍はなんだか楽しくなるのがわかった。

やっぱり人間、苦手なものがあるもんね。
あ、でも典様にはなさそうだけど…

「大丈夫だ。賢（ケン）の家に向かおう」
青ざめた顔のまま、そう答える強に同情しながらも藍はうなずく。
一刻もこの美女の姿から解放されたかった。
柔らかい肌、邪魔なくらい大きく胸、長い金髪の髪、普通であれば喜ぶ話なのだが、藍はこの美女姿が窮屈でたまらなかった。
強もどうしても意識してしまうらしく、飛んでるときも妙に緊張しているのを感じだ。

ま、襲われることはありえないと思うけど。

「藍殿。あの塔が賢の家だ」
緑森国の森の中を歩きながら、強が遠くに見える塔を指差す。

「結構遠そうですね。飛んでいきますか」
「…歩いて半刻もかからない。歩いていこう」
飛ぶという単語にぎょっとした強に藍は同情を覚え、北の呪術師賢の家には歩いて向かうことにした。

「強様、賢様とはどういうお知り合いなのですか」
『あいつならなんとか賢に頼めるかもしれない』と典が言っていたので、藍は2人がどういう関係か気になっていた。
「お知り合い…、賢は俺の兄だ。母親が違うがな」
「あ、兄?!」
意外な答えに藍の声が上ずる。

でも兄なら、確実に元に戻してくれそうだ。

藍は早くも元に戻れる可能性が高いことに気付き、嬉しくなって微笑む。
「強様、先を急ぎましょう」
「そうだな」
嬉しそうな藍に強は少しだけ複雑な顔になったが、軽い足取りで前を歩く藍の後を追った。

呪いが解ける時

「強（キョウ）！あれ？この麗しいお方は？さっつ、中に入って座って」
塔に辿り着き、木の扉を叩くと、強と同じ顔で黒髪のくりくり巻き毛の男が出て来て、藍（ラン）の腕を掴むと塔の中に連れ込んだ。扉を締められそうになり、強がぐいっと無理に中に入る。

何？この人は？

藍は戸惑いながらも勧められた椅子に座る。
その男―賢（ケン）は顔のつくりは強とほぼ同じで男前、その髪型が軽さを与え、強の兄というより弟に見えた。

「どうぞ。お茶だよ」
賢はにこにこ微笑みながら、藍にお茶の入った木製の湯飲みを渡す。
「強は自分で作れるだろう？」
賢はそう言うと藍の隣に座った。
「ちょっと」
「兄さん」
強が睨みつけると賢は肩をすくめて立ち上がる。そして真向かいの椅子に座った。
「兄さん、あんた、宮に呪いを放っただろう？」
強はどかっと兄の斜めにある椅子に座るとそう口にした。
「……さあ、なんのこと？」
「とぼけても無理だ。この子は兄さんの呪いでせいでこんな姿になったんだ」
「…こんな姿って。こんな美女に？」
「ああ」

「大成功だ。うわああ。信じられないな。本当は帝か典を女性化したかったんだけど、全然成功だ！」
「…何が大成功ですか！喜んでないで元に戻してください！」
藍は大喜びする賢に対して、苛立ち交じりにそう叫ぶ。
まったく罪悪感、反省の色がない賢が信じられなかった。
「怒った顔も可愛いな。本当大成功。ねぇ。君、僕と一緒に暮さない？君が望めばなんでも叶えてあげるよ」
「冗談！」
藍はそう叫ぶと、立ち上がり賢の胸倉を掴む。
「こんな姿、こんな姿、私は大嫌いなんです。元に戻してください！お願いします！」
「えー？どうして？すごく綺麗だよ。もったいない」

ぶちん。

藍はその能天気発言で自分の堪忍袋の緒が切れるのがわかった。
そして強には藍の表情が冷たく、その目に怒りが浮かぶのが見えた。

「藍殿！」
強が止めようと動くより先に、藍が動いた。
「！？」
賢の体が吹き飛び、壁に激突する。
「東の呪術師だか、なんだかわからないですけど、呪術師が死ねばその呪いが解けるのを知ってますか？」
藍の青い瞳が氷のように冷たい光を放つ。賢は壁からゆっくりと立ち上がりながら顔を引きつらせる。

「藍殿！」
強はこのままでは兄が殺されると思い、藍の前に立つ。

「藍殿。殺すのはやめてくれ。ふざけた男だが俺の兄であることにはかわりがない。兄さん！藍殿に殺されたくなかったら、素直に呪いを解くんだ」
「…わかったよ」
二人に見つめられ、賢は肩をすくめると頷いた。

「飛ぶのか？」
「もちろん」
「強、もしかして怖いとか？」
「そんなことない！」
「じゃ、行きましょう！」
「行こう！」
呪術師の二人は強の両脇に並び、その腕を掴むと上空に飛び上がる。
強は顔を引きつらせながらも、悲鳴を上げないように口を必死に閉じてその時間を耐えていた。
元に戻るためには典（テン）の協力が必要と、藍達は宮に戻ることになった。

「お久〜。典」
宮の呪術部に到着し、典を見つけると賢がへらへらと笑いながら手をふる。美しい呪術師はあからさまに嫌そうな顔をした。
「どうしたの？打ち首にでもなりにきたのかい？」
「打ち首？なんで？」
「呪いをかけたのは君だろ？親切に私は何もまだ報告してないが、

君がここにきたということは私が帝に報告しないといけないだろうね」
「報告？！それは簡便。ちょっとした冗談のつもりだったんだ。だって、ほら藍ちゃん、すごい効果だろう？」
「確かに…」
「確かにってなんですか！早く元に戻してくれませんか！」
藍は小声で話す二人にブチ切れるとそう叫んだ。
「そうだね。じゃ、私の部屋に行こう」
典はにこっと微笑むと自分の部屋である呪術司室に藍達を連れていった。

「じゃ、藍ちゃんはここに座って」
「はい」
部屋の真ん中の椅子を指差され、美女姿の藍は素直にそこに座る。
「呪いを解く方法はいたって簡単。元に戻るように呪いをかけるんだ。僕は藍ちゃんの元の姿が知らないから無理だけど、典なら覚えているだろう？」
「そうだけど。でもそんな簡単にとけるのかい？」
「だって、僕が放った呪いはそんな複雑なものじゃないよ」
「それにしては私の結界を破ったけど」
「そうそう、結構強力な呪いでしたよ」
「そう？」
「うん、そうです」
「藍ちゃんにそう言ってもらえて僕は嬉しいな。やっぱり元に戻る前に一度僕と…」
「兄さん！」
藍に抱きつこうとする兄の腕をそれまで黙っていた強が掴む。
「まったく。残念だ」
「残念じゃないです。早くしてください！」
これ以上話していたら典までそう言い始めるのではないかと思い、

藍が苛立って声を上げる。
「はいはい。わかったよ。じゃ、典よろしく」
「ああ。藍、目を閉じて。少し痛いかもしれないけど。その時はごめん」
「痛いって！」
「しっつ、静かに」
師にそう言われ、藍は仕方なしに大人しく目を閉じた。

呪術司の呪いなど、受けたらどうなるか実際に怖かった。
痛いってどれくらいなんだろう？

「行くよ」
典は深呼吸すると両手を重ね合わせる。そして呪文を唱え始めた。
賢と強は黙ってその様子を見ている。

「藍！」
そう声がして、典の両手から光が放たれる。

「！」
目を閉じてるがその光を感じ、藍は両手を握りしめる。痛みは感じなかった。ただ不思議な映像が頭の中に流れる。それは少し少年のような幼さが残る帝の姿であり、美しい銀髪の女性がその側にいた。

帝の正妻ではないよね？
帝の正妻は帝と同じ色彩の黒髪、黒い瞳の女性だった。
じゃあ、あれは？

光が消え、藍を包んでいた煙が窓の外から逃げていく。

「藍？！」
「あれ？」
典と賢の声に、藍は嫌な予感を感じる。
そして目を開けるとまず、妙な違和感を覚えた。
銀色の髪が見え、ほどよい大きさの胸のふくらみが見える。
明らかに自分の元の姿ではなかった。
「賢さん！！」
藍は椅子から立ち上がると、ギロリと元凶の東の呪術師を睨みつける。
「今度は別の姿になったじゃないですか！どうするんですか！」
「いやあ、その姿もかわいいなあ。今度の姿も好み♪」
「そういう問題じゃないです。もういいです。あなたを殺して、元に戻ります！」
「うわあ！待った、待った！！」
銀色の真っ直ぐに伸びた髪を鬱蒼しそうに振り払い、緑色の瞳に怒りを浮かべ、藍は手の平に気を溜め始める。
「藍！待ってくれ、兄さん、他に方法はないのか？」
「いや、だって、僕がかけた呪いであれば、その方法で簡単にとけるはずだよ」
「言い訳はもういいです。覚悟してください！」
藍が手の平を賢に向ける。
「藍！」
師の鋭い声で、藍は反射的に手を降ろす。すると溜めた気も消滅する。
賢はほっと胸をなでおろし、強は親友を見つめた。
「藍。これは多分、賢だけの呪いじゃない。多分誰かがかけた呪いと賢の呪いが融合してできた呪いなんだ」

「ああ、だからかあ」
「誰かって、誰なんですか！」
自分だけの責任ではなかったと呑気な声を上げる東の呪術師を睨みつけ、藍は師を見つめる。
「その姿、心当たりがある。まずはこのことを帝に報告する必要がある。藍、一緒に来てくれるかい？」
「報告！打ち首は嫌だ！」
「賢、心配しなくても大丈夫。帝もそう乱暴な方ではない。ただ一つお願いすることがあるけど」
「何？」
「私の代わりに呪術司として宮に残ってもらう。私は帝を狙ったものを捕まえる必要があるから」
険しい顔をしてそういう典に誰も何も言えなかった。
藍も元に戻るどころか、別の姿になったことに怒り心頭であったが普段と様子の異なる師の様子に黙っていることしかできなかった。

帝を狙うもの

典(テン)が帝に緊急謁見を求めると、半刻ほどして帝と会うことができた。

帝は髪を結いあげ冠をかぶり、青と紫の着物を着て部屋の一番奥の大きな椅子に腰かけていた。今朝寝室でみた姿とは異なり、正式な身なりに藍(ラン)はすこし緊張する。

典は頭を垂れると帝に近づく。藍もその後に続いて部屋に入る。部屋にはすでに人払いがされており、帝を含め藍達3人だけであった。また通常帝と謁見する者の間に垂れ下がっている布は天井に巻き上げられていた。

なんか、どきどきするんだけど。

藍は近づいてくる帝の姿を見ながら早まる動悸を抑えるため胸を押さえた。

しかし自分のものとは思えぬ柔らかさに顔を歪めると手を降ろした

「!?」

帝は典の姿を確認し、藍に目を向けると驚きで目を開いた。

「典、どういうことか説明してもらえぬか?」

「帝、今朝かけられた呪いを破壊した際に、藍の姿が美しい女性に変化したのを覚えてますね?私たちはそれが賢(ケン)によってもたらされた呪いだと思ったのですが、呪いを解こうと呪いを再度かけたところ、藍は麗(レイ)の姿に変化しました。このことから今回の呪いは賢だけではなく、麗の関係者よって作られたものだと考えられます」

「麗か」

麗?

聞いたことがない名前に藍が首を傾げる。

ああ、でも私が知ってるわけないか

藍はそう一人で納得し、帝と典に目を向ける。二人の間にはどことなく緊張感が流れていて、麗という女性が二人にとって大事に女性であることがわかった。

「麗は死亡したはずだ。あの時に」

「はい、私も生きているとは思えません。したがって、今回は麗本人ではなく、その関係者だと思います」

死亡…。

すでに亡くなっているんだ。

なんだか故人の姿に変化しているって変な気持ちだ。

「帝、私はこれから藍を連れ、麗の村に向かいます。帝の警備は今回の呪いの責任を取ってもらい、東の呪術師賢に頼むつもりです」

「責任。まあ、賢であれば咎めないつもりであったが、典の代わりに警備をしてくれるのであれば有難い。賢であればお前の代わりが務まろう」

「はい」

咎めないって…

帝もいいのかな、そんなんで。

まあ、あの人じゃ、絶対に国家転覆とか考えてないって言えるけど…

藍は東の呪術師の軽そうな笑顔を浮かべると、思わずため息をつく。

「藍？」

「申し訳ありません」
帝の前だったと、藍は慌てて口をふさぐ。
「すまないな。巻き込んでしまったようだ」
「巻き込むなんて。確かにいろいろな姿に変わるのが嫌ですが…」
「藍」
正直な感想を述べたせいか、典がめずらしく諌めるよう名を呼ぶ。
「典。咎めることはない。姿が変わるということはいろいろ不便であろう。すまないな」
「！そんな恐れ多い」
頭を軽く下げられて、藍はぎょっとする。
「帝。そんなに軽く頭を下げるものではありません。藍が調子に乗りますから」
「調子って何ですか！」
「藍。帝の前だよ」
藍はいつもの調子で師に返したことを気づき、無作法だったと頭を下げた。
帝はその様子に苦笑した後、じっと藍を見る。その視線からなんだか切ない想いが伝わり、藍は視線を合わせることができなかった。

あの時の映像、帝と麗という女性は恋人同士だったのかな。
確かにそういう雰囲気はしてたけど。
死亡って、なにか秘密がありそうだ。

「帝。私たちは早速宮を出て、麗の村に出発するつもりです」
「そうか、気をつけるのだ」
「はい」
典は深々と帝に頭を下げると、背を向ける。藍は考えごとから我に返ると慌てて師の後を追って、帝の部屋を後にした。

「典、僕にまかせておいて」
典の代わりに宮の臨時の呪術司になった賢は胸をばんと叩くとそう言った。

頼りない。
限りなく頼りない。

そう思ったのは藍だけではないらしく、典も強(キョウ)も訝しげな視線を賢に向けている。
「そう、長くは宮を空けないつもりだけど。また帝を狙ってくるかもしれないから、頼んだよ」
「任せておいて。この僕は東の呪術師だよ。そう簡単に結界を破壊させないよ」

本当かな？
この人自分の呪いと他の呪いが融合したのもわからなかったのによく言うな。

「さあ、典。早く出かけたら？日が暮れるよ」
「？そうだね。藍、行こう」
せかすようにそう言う賢に典は首をかしげたが、藍に声をかける。
「典、俺もいく」
呪術司室を出て行こうとする藍と典を強が呼びとめた。
「強？」
「強様？」
「俺も一緒いく。元はといえば、俺が藍殿を宮に連れてこなければこうなることはなかったし、責任を取るつもりだ」
「責任って、私が君に頼んだことだ。責任を感じることはないよ」
「そうですよ。強様」

「あ、強、もしかして藍ちゃんが気になるとか？」
「？！」
「兄さん！」

なんてことを言うんだ、賢さん！

ふと藍が強をみるとその顔が少し赤くなっているような気がした。
「そうか、そういうことなのか。藍、大歓迎だよね。よかったね。好きになってくれる人がいて」
「それどーいう意味ですか？！」

っていうか、典様、失礼ですけど。
強様だって困ってるし。

「あーあ、しょうがないなあ。可愛い弟のため、藍ちゃんは諦めるよ。宮にはいっぱい美人さんがいるから別の人探すかな」
「賢、その前に呪術司の仕事を優先するように。もし帝に何かあったら覚悟しておいてね」
「はーい、典。わかってるよ」

なんか、その方向で話が終わってるんですけど。
絶対に勘違いだと思うんですけど？？

「さあ、藍の未来の夫と義兄が決まったところで行こうか」
「だから、そんなんじゃないですよ！」
「典！」
「冗談だって」
「冗談なの？」

そうして、銀髪の可愛い女性に変化してしまった藍は、誤解を生

んだまま今度は典と強と共に、麗の村に向かうことになった。

「くそっつ。完全に失敗だ」
「草(ソウ)、焦るものではない。初めての呪いで帝まで届いたのが奇跡的だ」
「でも、殺すことはできなかった」
短い黒髪に緑色の瞳を持つ少年――草は口を尖らして、師匠の凛(リン)を見上げる。
凛は南の黄土国に住む呪術師で、南の呪術師と呼ばれていた。その姿は前髪を長く垂らした白の短髪に、真っ青な瞳を持った美しい女性だった。その冷たい印象のためか、氷の呪術者と呼ぶものもいた。

数ヶ月前に宮京で宮の警備兵と揉める草を見た。自分が帝の息子だと言い張り、警備兵の怒りを買っていた。かわいそうだと思ったので間に入り、草を引き取った。
話を聞けば、本当のような話であった。
半信半疑の凛に草は証拠とばかり、数ヶ月前に病死した母の形見を見せた。それは帝が通常もっているお守りだった。
少年は十四歳。十五年前に帝が西の国に少数の供を連れ旅行した話を聞いたことがあった。ありない話ではなかった。

「利用価値があるよね」
恋人である空(くう)に引き取った少年の話をすると嬉しそうに笑った。
そして草を利用し帝を呪い殺す算段を凛に持ちかけた。
凛個人で帝に恨みなどなかった。しかし、凛は空を深く愛しており、その計画に乗った。

「そんな…母さんが…」
草を身ごもった母親を帝が容赦なく切り捨てた。
そう作り話をすると草は唇を血が出るまで噛みしめた。
その大きな緑色の瞳は怒りで真っ赤に染まっていた。
「凜様、あなたは南の呪術師なんでしょ？俺に呪術を教えてください。俺は絶対に帝を許さない」
少年はいとも簡単に空の策略に嵌った。
凜は草を弟子に迎い入れると呪術を教えた。筋がよくその腕はめきめきあがった。
そして今朝、自分の力を試したいという草の願いをうけ、帝に呪いを放った。
美しき呪術司の噂は聞いており、結界に弾かれることを予想していた。
しかし呪いは結界を破った。
しかしながら、一人の女性呪術師によりその呪いは破壊された。
破壊される直前、女性の姿が変わるのが見えた。
呪いは草だけのものではなかった。
誰かの呪いを融合したようだった。
「凜様。行きましょう」
確実に帝を殺害するため、凜達は宮京に移動することを決めた。
奇跡は二度と起きない。
宮を出た帝を狙うつもりだった。

「空様は元気かな」
「ああ、元気だろう」
草の無邪気な言葉を聞き、凛は胸が痛むのがわかった。空は優しく歌いながら人をだます。草は凛同様、空を慕っていた。
「飛んでいきますか？」
「そうしよう」

空が橙色に染まっていた。あと半刻もすればすっかり空は闇に変わるだろう。

二人は空に舞い上がると、宮京に向かって飛んだ。

一

「大丈夫ですか？」
西の碧雲国（へきうんこく）まで藍（ラン）達は一気に飛んだ。呪術師である藍とその師、典（テン）はけろっとして碧雲国の大地に降り立ったが、強（キョウ）は明らかに青ざめた顔で、その足元はふらついている。
「大丈夫だ」
そう答える声もどうしても無理をしているようにしか聞こえない。
無理しないでもいいのに。
藍はふらつく足元を頑張って大地に根付かせ、すくっと立つ強に目を向ける。
いつもであればその親友が無敵の警備隊長殿に「本当は苦手なのに、強がらなくもいいのに」などと痛恨の口撃を加えるのだが、師はめずらしく渋い顔をして、森の中を見ていた。
「……何年ぶりなんだ？」
何年ぶり？
顔色が元に戻り始めた強が親友にそう尋ねる。
「……十五年かな」
典は目を細め、森の中を見つめる。
「帰ってないのか？」
「帰れないだろう」

どういう意味？
帰る？
「すっかり日が暮れてしまったね。今夜が村に泊まるしかなさそうだ」
「…大丈夫か？」
「ああ、多分ね」
どういう意味？
藍は目をぱちくりさせて、２人のやり取りを聞いていた。
「藍。君にはまだ説明してなかったね」
典は腑に落ちない表情をしている弟子に笑いかける。
「実は麗は私の従姉妹なんだよ。村は私の出身地だ」

宮京に辿りついた凛（リン）と草（ソウ）はまず宿を取った。本格的に動くのは明日からにするつもりだった。
凛はまず空（クウ）に連絡をとることにした。そのためには空の部下、紺（コン）に連絡を取る必要がある。
紙に文字を書き、気をこめる。すると紙はくしゃっと音をたて、小さな鳩に変化する。
凛は紙の鳩を掴むと窓を開け、空に向かって投げた。それは風に乗ると、上空に吸い込まれるように飛んでいった。
「夜には空から連絡が入るはずだ。その前に夕食でもとっておこう」
「はい」
草は、紙鳩が消えた、星が輝き始めた空から目を話すと、にっこり笑った。

「麗？」
日が暮れたばかりの村に藍達が到着し、村人は銀髪に緑色の瞳の藍を見ると騒ぎ始めた。
しかし、その横に典の姿を確認すると、今度は非難や敵意の視線に変わる。
「典、どういうつもりだ？久々に帰って来たと思ったら趣味の悪いいたずらか」
背が高く、筋肉隆々の男が井戸から水を汲む作業を中断して、出てきた。
「田（デン）、久しぶり。麗のことで聞きたいことがある。この子は呪いで麗の姿に変わってしまったんだ」
「ふん。お前に話すことなど何もない。裏切り者が！」
「そうはいかない。知ってることを話してもらおう。帝の命がかかってるんだ」
強が田の鋭い視線から典を守るようにその前に立ちふさがる。手はいつでも刀が抜けるよう腰の鞘に当てられている。

物騒だな。強様。
でもそれくらいしないと、答えてくれなさそうだ。

でもなんだろう。
典様が裏切り者だなんて。
天下の呪術司に吐く言葉じゃないけど。

しかも私を見る視線が微妙だ。
友好的ではない。かといって敵意ってわけでもない。

十五年前に何があったの？

「田。久々に帰ってきた典に挨拶くらい返したどうなの？そこの男前の人も、そう物騒にしてもらっても困るんだけど」

少しつやっぽい声がして、藍の現在の姿、麗に似た姿の女性が現れる。

「翠（スイ）…」

「お久しぶりね、典。田、話くらい聞こうじゃない。麗に似たその子も困ってるみたいでし」

うわ。

すんごい色気だ。

藍は女性に見つめられ、どきどきするのがわかった。

「その男前も、刀から手を放して。さあ、話を聞きましょう。私の家についてきて」

「翠！」

「大丈夫。浮気はしないから」

「俺はそんなこと、」

ふとそう言われ真っ赤になった筋肉男に翠が微笑む。

夫婦？

かなりでこぼこだけど。

「田。あともう少しお水が必要だから。お願いね。さ、典、他の二人もついてきて」

翠はそう言うとくるりと背を向け、元来た道を戻っていく。典はその後を追い、強と藍は顔を見合わせる。

「強様。強様は事情を知ってるんですか？」
「俺も詳しくはしらない。話したがらないからな。とりあえず、あの翠って女性について行こう。なにか手掛かりがあるかもしれない」
「そうですね」
藍は強と共に典の後を追う。
田はため息をついたが、井戸の方へ中断した作業を続けるために戻っていく。村人も藍達に視線を送るのを止め、それぞれの家に戻っていくのが見えた。

なんだか、わからないけど。
色々秘密がありそう。

気になるのはやけに大人しい典様だけど。
翠さんとどういう関係なのかな。
この今の私の姿に似てるってことは麗さんの姉妹かなにか？

え、じゃあ、容疑者だ！

藍がそう結論を出したところで、　目の前に茅葺き屋根の家が見えて来る。窓からぼんやりと光が溢れていた。

「さあ、どうぞ。入って」
翠は扉を開けると、藍達を招き入れた。

二

「！？」

夕食を済ませ、宿の部屋に戻ると部屋に人影があった。声を上げそうになる草（ソウ）に目配せし、凛（リン）はいつでも戦えるように気を高め、部屋の襖を開ける。

「待っていたぞ」

部屋にいた壮年の男は紺（コン）だった。髪をそり上げ、いつものようにその灰色の瞳には感情がやどっていない。鴉のような黒い着物を着て、座敷の上にぴんと背を伸ばし正座している。

「空（クウ）様がお待ちだ。着いて来い」

紺はそう言うとすくっと立ち上がり、窓を開ける。男は空の側に仕える呪術師だった。腕のほうは戦ったことがなかったのでわからないが、その隙のない立つ振る舞いからその力量を想像することができた。

「草、凛」

空を駆ける紺の後を追い、二人が街はずれの古ぼけた家に降り立つと空がにこやかに迎えた。

「ありがとう。来てくれて。今夜はこちらに泊まるといいよ。宿よりは快適だ」

「空様、ありがとうございます」

草が恐縮してぺこりと頭を下げる、

「草、悪いけど、凛を少し借りていいかい？ちょっと話があるんだ」

「…もちろんです」

「そうか。よかった。紺。草を部屋に案内して」

「御意」

紺は頭を下げると草についてくるように合図をする。草は一度凛の顔を見た後、紺の後を追った。

「草はすっかり凛のかわいいお弟子さんだね」
凛は空の言葉に返事を返さない。
「凛、会いたかった。君は本当に宮京が嫌いのようだね」
空は凛の肩を掴み、その体を引き寄せるとそう囁く。
「凛、でもどうして帝に呪いを放ったことを僕に報告しなかったんだい？」
空の声が優しげだが、凛にはその声に怒りが混じっていることがわかる。自分を抱く手に力が入り少し痛いくらいだった。
暗闇のような真っ黒な瞳が自分を見つめる。
氷の呪術師と言われる凛も空にかかれば、ただの女だった。

一年前に出会い、凛は空に囚われた。
空の側にいる「女」である自分が凛は嫌いだった。しかし、もう彼から逃れられない自分にも気がついていた。

「ふーん、なるほどね。でも麗は死んだわよ。私は呪術なんて使えないし。知らないわ」
話を聞いた翠はそうはっきりと答えた。
「…そうか」

なんだ、手掛かりなしか。
でも、おかしいな。
だったら誰が帝に呪いをかけたの？

「本当に麗と女性は死んだのか？」
「…嫌なことを聞くわね、男前。典、あなたも見たでしょ？海に落ちていく麗を、あれで生きてるわけないわ」
翠は思い出したくないように顔を曇らせる。

海に落ちた？
何があったんだろう。
知りたい。

「死体を確認してないんだろう？生きてる可能性が」
「そこの男前！たとえ生きていたとしても麗が帝を狙うわけないじゃないの。典、あなたもわかってるんでしょ！」
「…そうだね。麗ではない」
「帰って、やっぱり話なんて聞くもんじゃなかったわ」

結局、藍達は翠にそう言われ、それ以上のことを聞くことも出来ず、家を追い出された。

何があったんだろう？

ちらりと藍は師の顔を見る。その表情は苦渋に満ちていた。

らしくない。
典様にこんな表情をさせるなんて、いったい何が…。

藍の疑問を代わりに聞いたのはその親友の強（キョウ）だった。

「典。十五年前のことを話すんだ。翠って女性は麗の妹か？死体が見つかってないってことは生きてる可能性があるってことじゃないか。そして帝の命を狙ってると考えられないか？」
「それは絶対にありえない。あの麗が帝を狙うなんて」
「典。十五年前に何があったんだ？話してくれ。そうじゃないとこの件は先に進めない。藍殿も元にもどれない」
ふいに自分の名前が出てきて、藍は驚いた。しかし事実なので頷

く。

呪いで十五年前に亡くなった女性、麗の姿に変化した。
だから絶対にその関係者のはずだった。
それを探るため十五年前の真相を知る必要がある。

「わかった…話そう」
典は唇を噛むと、強を見据える。

翠に家を追い出され、一行は村から出て森の中に出てきていた。
森はすっかり闇に包まれ、お互いの顔が見えないくらいだった。典が光の球を作り、手の平から放つ。それは藍達三人の間をふわりと上がっていき、上空で止まった。柔らかな光が3人を包む。
典はその光の中で、十五年前のことを語り始めた。

三

今帝の海（カイ）は皇子であった十五年前、典（テン）と数人の供を連れ、お忍びで典――麗の村を訪れた　ゆっくりできるところがないかと海に相談され、典は自分の村を勧めたのだ。海と森に囲まれた村はとても豊かで、静養するにはいい場所だった。

典が村から宮の呪術部に入り、五年が経過し、呪術司の補佐の役目をするようになっていた。帝の後継者である海の身辺警護を任され、よき相談役として典は海に仕えていた。

両親が早くに亡くなった典は従姉妹と共に育った。同じ年の麗（レイ）は家庭的な女性であり、その妹の翠（スイ）は麗と似た可愛らしい顔立ちだったが、性格は男勝りで麗とは対照的だった。

典は久々に村に帰ることを楽しみにしていた。また従姉妹たちが時期帝の海を一目でも拝める機会を喜ぶに違いないと思っていた。まさか、海と麗が恋仲になるなんて予想もしていなかった。

そしてその恋が麗を破滅させることになるなど、想像もできなかった。

数日後、典は海を村に連れてきたことを後悔することになった。

二人は磁石が引き合うように恋に落ちた。そして若い二人は誰も予想もできない行動をとった。帝になる海は黒族以外のものと婚姻を結ぶことができない。愛妾として麗を側に置くことができても、それは二人にとってつらいことだった。

若さのあまり、二人はすべてのしがらみから逃げだ。宮の呪術師として、麗の行動は咎めるべきものであった。時期帝を誑かせた罪と、典とそのほかの兵士は二人を追った。

二人はすぐに見つかり、引き離された。そして麗は海と二度と会うことが許されなかった。海が宮に戻る日、麗は海底に消えた。追う典を振り切り、海にとんだ。典の力を持ってしても、救えなかった。

「……帝も見てたんですか？」

「ああ」

典は短くそう答える。

だから、私をあんなに辛そうに愛おしそうに見ていたのか。

「でも、それじゃ、絶対に麗さんじゃないですよ。関係者って、翠さんしかいないじゃないですか」

「そうだね」

「翠か…どこかの呪術師を使って呪いをかけたか…」

「でもそれにしてはおかしい」

典がそうつぶやき、空を見上げる。

確かに、もし呪いをかけた本人であれば私達に会うなんて考えられない。

しかもあの性格じゃ、そう思えないし…

「うわああ！！誰か、誰か助けてくれ！」

悲鳴がふいに聞こえ、藍は考えを中断させられる。

「助けないと！」

藍（ラン）は反射的にそう言い、悲鳴の上がった場所へ飛んだ。強（キョウ）はすぐにその後を追い、典は少し考えた後、同様に後を追った。

「あんたたち！何してるの！！」

現場にたどり着き、藍は五十歳すぎの男をつるしあげている数人

の人相の悪そうな男を見た。
「おやおや、可愛らしいお嬢さんだ。顔に似合わず、威勢がいいな」
松明を藍に向け、その姿を確認して男たちが下卑た笑いを浮かべる。
「お嬢さん、俺たちを遊ぼうぜ」
「じゃ、遊んでもらいましょうか！」
藍が男達にそう言い放つと気を両手につくり、投げる。
「ぐほっつ！」
「く、呪術師か！」
仲間を気で倒され、残った男達が顔色を変える。
「これもあげる！」
藍は皮肉な笑みを浮かべるとさらに気を放ち、すべての男達をコテンパンにやっつけた。
「よっし、これでおしまい」
男達を一塊にして、木の蔓で括り付け藍はパンパンと手を叩く。
「あ、まずい。火が！」
藍は男達が持っていた松明が落ち、燃え始めた木々を慌てて足でもみ消そうと慌て始める。助けられた男は目の前で繰り広げられている光景を信じられない様子で呆然と見ていた。
「藍殿？！」
駆けつけた強は一塊にされた男達、火を必死にもみ消そうとしている藍を見て驚く。しかしはっと気がつくと側に駆け寄り、火を消そうと動く。
「藍、強。下がって」
たどり着いた典は慌てる様子も見せず、二人にそう言うと両手に気を作る。火に向かって気を放ち、火を上空に飛ばす。するとそれは一気に空で燃えあがり消えた。
「すごい！」
藍は師の技を見て、目をきらきらさせる。

やっぱり伊達に呪術司じゃない。
すごいな。

「大丈夫か？」
強が呆然としている男に声をかける。普通の人が見ると信じられない光景だろうなと強は男の心中を思いやる。
「あ、大丈夫です。ありがとうございました」
強の腕を掴み、立ち上がりながら男は藍に頭を下げる。そして、ふと、典の作った光に照らされ明らかになった藍の顔を凝視した。
「麗さん？！あんた、なんでこんなところに？！」
「？！おじさん、この顔の持ち主を知ってるんですか？」
「この顔の持ち主？あんた麗さんじゃないのか？そうだな。麗さんのわけないか。麗さんが呪術師のわけがない。しかもは紫曼（シマン）の町にいるはずだ」
「紫曼の町？！」

それってここからかなり遠いんですけど？！

「旅の方。私たちは麗を探しているんだ。麗の情報を教えてくれないか。私は宮の呪術司で、麗の従兄弟だ」
美しき顔で邪気のない笑みを向けられ、男は呪術司だし、悪い人じゃなさそうだと、麗について知っていることを話し始めた。

四

「凛（リン）。明日、帝は宮を離れて、雁山（かりやま）に行くんだ。いい機会だと思わないかい？」

空（クウ）は凛の長い前髪をその長い指に絡めながら、そう囁く。凛は空の側から体を起こすと真っ青な着物を羽織った。そして背を向ける。

「君はつれないよね。でもそこが僕の好むとこなんだけど」

空も体を起こして肩まで伸びた黒髪を鬱陶しそうに振り払う。空は帝によく似た顔立ちをした男だった。年ごろは二十代後半、凛は空の身分を知らなかった。黒族であることは間違いがないのはわかっていた。しかし身分を知るのが怖く聞いたことがなかった。

「僕が帝を招いたんだ。お茶をしようと思ってね。どう？」

「……そうだな。いい機会だ」

「じゃ、決まりだね。楽しみだよ。今朝もいいとこまで行ったみたいじゃないか。おかげで典の奴が側にいない。凛、草とともに腕の見せ所だよ」

ふふっと空が笑う。

「凛。僕は母上が亡くなってからこの日をずっと待ち焦がれてたんだ。帝が死ねば、継承権は叔父である僕に回ってくる。帝の子供は草しかしない。純粋な黒族ではない草は帝になれないからね」

帝の叔父という男は、着物の帯を締め部屋を出て行こうとする氷の呪術師の腕を掴む。

「だめだよ。凛。計画をまだ練っていない。今夜は部屋に帰さないから。草もわかってると思うけど？」

空は凛の腕を掴み、胸にその体を抱く。甘い囁きがその行動を封じる。

氷の呪術師は空の腕の中で人形のように無抵抗だった。

「凛は本当にきれいだ」

空は狐のように笑うと凛にくちづける。

宮京の離れにある屋敷はみなに見捨てられたように静かだった。

「やっぱり帰ってこない」

月が真上に上がり、時刻は真夜中であった。

草(ソウ)は襖を閉めると床に入る。

空を一緒にいる凛は別人のようだった。そしてこうやって夜は帰ってこないことが多かった。

「しょうがない。寝よう」

深く考えてもしょうがないと草はあくびをして目を閉じる。

母親を突然なくし、その死直前に自分の父親が帝をあることを知った。

迷わず宮京に向かった。

警備兵は冷たく自分をあしらった。しつこく絡む草に苛立ち、刀を振り上げ、凛が止めに入った。止められなかったら自分は殺されていたかもしれない。

凛は命の恩人だ。

そして空は生きる道を授けてくれた。

母を、自分を捨てた帝を殺す。

草にとって、それが今自分が生きている証であり、目的だった。

「子供?」

「そうです。草っていうかわいい少年です。黒髪に緑色の瞳という変わった色彩の組み合わせでしたが……」
男から麗(レイ)の住んでいる場所を聞き出し、藍(アイ)達は男を森の外まで送り届けると紫曼(しまん)の町に向かった。
思っていない情報に飛ぶのが苦手な強(キョウ)も嫌な顔をせず、藍達と供に紫曼に向かった。

眠い…

朝から宮に引っ張り出され、緑森国(りょくしんこく)、碧雲国(へきうんこく)に飛び、紫曼の町まで足を伸ばすことになり、藍の体力は限界に達しようとしていた。
しかし、ここで弱音を吐いたら、じゃあ、君はその姿でいいよねと師に嫌味を言われる可能性があり、藍は必死に師と供に強を支え、飛んでいた。

ぐらっ

「大丈夫か?」
紫曼の町に降り立ち、眩暈を覚えた藍はがしっと強に腕を掴まれた。
「あ、ありがとうございます」
やばい…
強様も自分も大変なときに…

自分の腕を掴み、側に立つ強を見上げると同じように青ざめた顔をしていた。
こちらは疲労というよりも、長く飛んだせいで、吐き気を催しているようだったが…
「強様、大丈夫ですか?」

藍の問いに、強はこくりとうなずく。

大丈夫じゃないよね。

続きは明日、ってことにはなんないかな。

藍はちらりと典(テン)を見る。

すると師は弟子の視線と気分が相当悪そうな親友を見て、ため息をつく。

「しょうがないな。今日はこの街に一晩泊まろう。麗の詮索は明日の朝だ。こんな遅い時間、動いてもしょうがないだろう」

「しかし…大丈夫なのか？」

大丈夫って、帝のこと？

やっぱり兄といっても賢(ケン)さんじゃ心配よね。

「大丈夫だろう。宮に張った結界は強力だ。帝はしばらく宮を出る用事がないはずだ」

「そうか、なら安心だ」

「強、賢もああ見えて東の呪術師だ。この国では多分五本の指に入る力量だ」

「五本の指？そんなに強い呪術師がいるんですか？」

師からそんな話を聞いたことがなかった藍は疲れた体に鞭打ってたずねる。

「ああ、一番はもちろん私だが、他に四人ほどいる。賢は四番手くらい、その次が君じゃないかと思っている」

「私？私もその中に入るんですか！！」

藍は疲れも吹き飛ぶ勢いで喜ぶ。

賢さんの次ってとこがちょっと許せないけど、すごい五本の指に入るなんて！

「そう、だから、この件が終わったら宮に残ってくれるよね？」
「それは簡便してください。宮は嫌いです」
「どうしてかな？宮には強もいるし」
「俺か？何でそこで俺なんだ？」
「だって君は藍のことが好きだろう？」
「？！」
典からふいに話を振られ、強は飛び酔いも忘れ、男前の顔をゆがめる。若干赤くなっているように見えないこともない。
「典様、強様をダシにしても私は残りませんよ。宮は大嫌いなんです。だいたい強様が私のこと好きなわけないじゃないですか！」
「そうかな？そうなの？強？」
「…そんなことは…」
「ほら、藍。みてごらん。やっぱり強は君のことが好きなんだ。どうせならここは仲良く二人で同じ部屋でも取るかい？」
「なんでそうなるんですか？！」
「典！」
「冗談だよ。冗談。さ、早く、宿に向かおう。私も少し疲れた。休みを取りたい」
典がけらけらと笑いながらそう言い、話はお開きになった。
藍は村に行き、いつもと様子が違う師を心配していたがこうして軽口を叩く様子をみて安心していた。

でも頭にくるけどね。

典を先頭に眠りに入った紫曼の町に藍達は足を踏み入れる。
動くものは何もなかった。
宿を表す提灯の明かりを頼りに三人は宿を探す。そして面倒だか

らと三人部屋を取った。
信じられない、典様の馬鹿！と思いながらも藍は疲労には勝てず、二人よりも先に眠りに落ちた。

「典、大丈夫か？」
「ああ、大丈夫だよ。明日は朝から行動だ。早く寝よう。強、悪かったね。藍と二人っきりになりたかったんだろう？」
「典！」
「冗談だ、冗談」
典はクスクス笑って床に入る。部屋はベッドではなく、布団を敷いて寝るようになっていた。
寝入った藍を一番端に寝かせ、二人の男は隣あわせで寝ることにした。
典が寝息を立てたのをみて、強も目を閉じる。
頭の中で鐘が鳴っているような気がして、気持ちが悪かった。しかし眠るしかないと目を閉じる。
すーすーと静かなかわいらしい寝息に強は思わず目を開ける。藍の平和な寝顔がすぐ横にあり、男前の警備隊長は胸がざわつくのがわかった。

そしてすくっと立ち上がると座敷ではなく、廊下に布団を引くと横になった。

『藍のことが好きだろう？』
笑い混じりに典にそう聞かれたことを思い出す。
そんな感情ではない。
脳裏でそう答えると意地っ張りの警備隊長は目を閉じた。

五

草(ソウ)が目を覚めると、側に人の気配を感じた。それが凜(リン)だとわかり、笑顔で目覚める。

「草。朝食を取ったら、雁山に行くぞ。帝が遠出をするらしい。空の招きでお茶会に参加する。そこが狙い目だ」

「はい」

目覚めばかりの脳はまだ完全に覚醒してなかったが、草はしっかり返事をする。

「さて、ご飯を食べに行こう。帝の周りには東の呪術師がいる。チャラチャラした男だが、腕は確かだ。力を蓄えねばな」

師匠ににっこり微笑まれ、草はすこし照れながら笑いかえす。

草は美しい師匠が大好きだった。氷の呪術師と呼ばれるのが不思議と感じるくらい、草にとって凜は優しい師匠であった。

凜と草が布団を畳み、襖を開けると朝日の眩しい光が差し込んできた。

今日、いよいよ間近に帝の顔を拝める。

自分と母を捨てた帝…

許さない…

草は朝日に誓うように目を凝らして空を見上げる。

凜はそんな草の様子を悲しげに見つめた。騙していることで胸が苦しかった。しかし、騙し続けなければならない。空(クウ)のために、自分が愛する男のために。

二人は外出着に身を固めると、屋敷を後にした。

「ひえええ！！お、お化け！」

これで何度だろう。

麗(レイ)はこの町では有名だったようだ。確かにこの町では浮くような色彩で、しかも可愛い顔立ち…目立つのは当然であったが、この反応はなんだろう。

「典(テン)様、これって」

「麗は生きていないかもしれないな」

藍(ラン)の顔を見るごとに人々が驚愕の顔を見せるので、典は苦虫を噛み潰したような顔をしてそう答えた。

しかし、あの男が紫曼(しまん)の町を訪れたのは半年前のこと。その時には確かに生きていたようだった。

「あそこだ」

男に教えてもらった住所を元に、一行は麗の家に辿り着く。一階建の長屋の一部屋が麗の家のようだった。

トントンと扉を叩く。

しかし反応はなかった。扉が堅く閉められており、典が開けようとしてもびくともしない。

「俺が開けよう」

気で破壊するのもなんだと思い、強(キョウ)は自分が開けることを申し出る。そして、力を込めた時、ふと声がかけられた。

「麗おばさん…？」

おばさんん？？

自分のことと信じたいが、麗の姿をしている今、『おばさん』と

いう呼び方が自分を指していることは明らかだった。
「…麗の知り合い？」
典は顔を引きつらせている藍に代わり、そうたずねる。声をかけた少女は赤毛を頭のてっぺんで団子にしている大人しそう女の子だった。
少女は警戒しながらもこくんと頷く。
「そうか。でもこの子は残念ながら、麗ではないんだ。私は麗の従兄弟でこっちが私の妹。麗とその子供の行方を探している。どこにいったか教えてくれないか？」

妹…
確かにこの場合は妹って言ったほうがいいよね。
麗さんの姿に呪いで変わってしまったと説明したら、ぎょっとするだろうし。

少女は、典と藍をじっと見つめた後、ぼそっと口を開く。
「……従兄弟。おじさん達は知らないんですね」
「…おじさん！？」
典がそう呼ばれわなわなと震えるのがわかった。
宮の美しき呪術司をおじさん呼ばわりするのがきっとこの少女だけだろう。

藍はおかしくて笑い出しそうになり、その後ろの強は明らかに笑いを堪えている様子で顔を背ける。

「…君、おじさんはないよ。私は宮の呪術司なんだ。せめてお兄さんと呼んでもらいたいんだけど？」
「す、すみません。呪術司？！ご無礼をお許しください」
少女は宮の呪術司がこんな田舎に来ていると知り、恐縮する。

あーあ、おじさん呼ばわりしたからって言わなきゃいいのに。

「あの、私達は純粋に麗さんの行方を探しているの。教えてくれない？」

典にすっかり恐縮してしまった少女に藍はにっこりと微笑んでそうたずねる。それは効果的だったようで、少女は安堵の表情を浮かべると話始めた。

「麗さんは四ヶ月前に病で亡くなったんです。その息子の草くんはお父さんを探すとかで、宮京に行きました」

「宮京…？草くんはお父さんについて何か君に言っていたかい？」

少女は先ほどはおじさん扱いしたが、その美しき顔で微笑まれてちょっと赤くなる。

出た。典様の必殺技！

この邪気のなさそうな笑顔、これまで何人もの人が騙されてきたか…

少女はふと何かを考えるように俯いたが、呪術司だし、人がよさそうだ、しかも草の叔父ということで、決意を固める。そして消え入るような声で答えた。

「草くんは、お父さんが帝だから、宮に入ったらいつか私を迎えに来てくれるって」

知ってたんだ！

「すみません。こんなこと。草くんを咎めないでください。多分お母さんが亡くなってすごく悲しかったから、そんなことを言ったと思うんです。もし宮京で草くんを見つけたら町に帰ってくるように伝えてください！」

少女が顔色を変えた藍達に慌ててそう言う。帝の息子など、そん

な大それたことを少女は信じていなかった。でももしかしたらと思うこともあり、宮の呪術司に話してしまった。

「大丈夫だよ。草くんは私達が見つけるから。君は心配しなくてもいい」

典がにっこり微笑むと少女は泣き出してしまった。

結局少女が泣き止むまで付き添い、藍達がその場から離れたのは半刻後だった。

「典。俺は今回の犯人は草を利用した者だと思うぞ」

「……君もそう思うかい？」

3人は街はずれの食堂に来ていた。

とりあえず、今の状況を落ち着いて話すべきだと典が提案したのだ。

藍は朝ごはんもまだだったし、運ばれてきた麺をつるつると食べながら二人の話を聞いていた。

「典様、草くんは本当に帝の子供なんでしょうか？」

「…多分、そうだろう。会ってみないと確証は持てないけどね」

箸で麺をすくい、そう質問する藍に、師はつめたい視線を投げかけ、そう答える。

だっておなかすいてたもん。

緊迫した状況だとはわかっていたが、藍は食欲には勝てなかった。

2人の男は食事を取る様子もなく、真剣な表情を浮かべている。

「藍。おなかはいっぱいになったかい？宮京に戻るよ。草を探す必

要がある」
「はいはい」
藍はそれ以上食べるのは無理だとあきらめ、箸を机の上に置き、立ち上がる。
睡眠もしっかりとり、おなかも結構満腹で、藍の体調は絶好調だった。

問題はこの動きづらい体だけど…

藍は垂れ下がる銀色の髪を鬱陶しそうに触る。
本当は切りたかったが、切ってしまうと元に戻った時、支障が出る可能性があった。

元に戻って、指が短くなっていたりしたら嫌だもんね。

「さ、行こうか」
典の言葉を合図に一行は店を出る。
そして、空に飛び上がる。

相変わらず飛ぶのが苦手な強も、さすがに二日目となると少しは余裕が出てきたようで、表情が少し和らいでいた。

「藍、嫌な予感がする。速度を上げるよ」
「はい！」
「！！」
師にそう言われ藍は気を高める。
そうして、呪術師の二人は恐怖に顔をゆがめる警備隊長の腕を掴み、猛スピードで宮京に急いだ。

六

「草(ソウ)、まず私が邪魔入らないように結界を雁山に張る。その後に帝を狙う」

師匠にそう言われ、緊張しながらも草はうなずく。

雁山についた草と凜(リン)はます茶会が開かれる屋敷を確認した。小さな屋敷は外に開かれた茶室があり、帝を警備する東の呪術師・賢(ケン)と数名の警備兵は外で待機していた。

空(クウ)がお茶を立てる姿が見えた。

そして二人は行動を始めた。

雁山の四方に結界用の文字が書かれた石を置く。屋敷の上空に飛んだ凜が気を高めると結界は完成する。それから二人は賢達に近づいた。

お茶会は進み、帝と空が楽しげに話をする様子が見えた。

凜は失敗したときのことも考え、身元がばれないように頭巾をかぶる。草も師にならい、紫色の頭巾をかぶった。

「!?」

ふいに賢の側の警備兵がなぎ倒される。

「甘くみないでほしいな!」

自分に放たれる気を賢が片手で払う。そして帝のいる茶室の中に飛んだ。

「何用だ?!」

帝が眉をひそめてそう尋ねる。
茶室には帝の姿しかなかった。いぶかしげに思いながらも賢は帝の前に立つ。
「下っていてください！」
賢は凛から繰り出される気を帝に当たらないように防ぐ。その隙に草が帝を狙って気を放つ。
「明（ミン）ちゃん！」
そう賢が名を呼ぶと、金髪の巻き毛の色香のある呪術師が天井を突き破って降りてきて、帝の前に立つ。
草の気をはじくと、明は帝を連れて、屋敷の外に走り出す。

帝と明を追う草の姿が見え、賢が後を追おうとするが、それを凛がとめる。

「どこかで見たことある瞳だけど？」
頭巾から覗く青い瞳を見つめて、賢が皮肉気に笑う。
「話したくないんだね。僕の力を甘く見てもらっては困るんだよ。こう見えても東の呪術師なんだから！」
賢は腰から刀を抜くと凛に飛び掛る。氷の呪術師は脇差を二本抜くとその刀を防いだ。

賢とは十代のころ、宮の呪術部で数年共に学んだことがあった。その時典（テン）も同じように部に所属していた。凛は二年ほどで呪術部を出たので賢と典が自分のことを覚えているかは定かではない。しかし凛自身は二人の力を覚えており、こうして戦えることは草のこと除けば胸が躍るような思いだった。

「何だって？帝が不在？」
「そうです。雁山にお茶会に出かけていますよ。賢様と明様もご一緒です」
宮に戻り、帝に報告をしようと思い宮部を訪ねると帝の秘書的な役割をこなす内所（ないどころ）にそう言われ、典達は顔色を変えた。
タイミングがよすぎだ。
典が不在の今、結界外の宮を出る。
どう考えても罠のように思えた。
「強（キョウ）、悪いけどまた飛ぶよ。藍（ラン）もいいかい？」
「はい！」
「ああ」
宮に戻ってきたばかりだというのに呪術司は弟子と警備隊長を連れ、再び空を駆けた。

典に美しいだけの呪術師と言われようとも、その力は呪術を習い始めて数カ月の草の力を圧倒する。
帝を後方に守りながら、明は草に攻撃を加える。
「くそおお！！」
少年の叫びが森に響き、その体が木に衝突する。
「子供？」
明は自分を戦っていたのが子供であることがわかり、攻撃を止める。
「？！」
紫の頭巾をかぶった少年草に近づこうすると、黒い影がよぎる。
明は間一髪でその攻撃を避けた。

草は自分の前に現れた黒装束の男を見上げる。
その背格好から紺(コン)だということがわかった。
「何者？！」
明は刀を抜くと男に切りかかった。
紺が後方にいる草に目配せする。
「しまった！」
明は自分の行動を後悔した。男に刀を弾き飛ばされ、気を打ちこまれる。自分の体が宙を舞っているのがわかった。そして少年の魔の手が帝に迫っているのが見えた。
「喰らえ！」
草は刀を握ると帝に振り下ろす。帝は脇差を抜くとその刀を受け止めた。
「お前は何者だ？なぜ私を狙う？」
帝は頭巾の隙間から見える緑色の瞳に懐かしさを覚えながらそう問う。
「教えてやるよ！」
草は帝を押しやり、後方に飛ぶ。そして頭巾を取った。帝に自分の恨みをぶつけたかった。母の悲しさを教えてやりたかった。
「俺は草。麗とあんたの息子さ。覚えているか？俺を身ごもった母さんを捨てやがって、許さない！絶対に殺してやる！」
草は両手に気を溜めると、帝に放った。

「結界だ」
雁山の上空に辿りついた典は忌々しそうにそうつぶやいた。
「四方の結界ですね。かなり強力そうです」
「藍、とても嫌な予感がする。四方に結界用の石があるはずだ。それを破壊する。強、悪いけど山の麓で待っていて」

呪術司の指示がそうあり、藍は強を麓に降ろすと石を探し始める。
強は苛々してその場で待つのが耐えられず、麓を詮索し始めた。

「ひとつ」
「ふたつ」
「みっつ」
「よっつ」
呪術司と弟子により、全ての結界の石が破壊される。
硝子が砕ける様な音がして、結界が消滅した。

典、藍、強は一気に雁山に突入する。

雁山の頂上付近の屋敷に辿り着いた典は凜と賢が息を切らして戦う様子に対面する。
凜は結界が破壊された時点で、誰がここに辿り着くのは予想していた。そしてその予想が当たり典の姿を確認すると、賢の気を叩きこみ、上空に飛ぶ。
「待て！」
典が頭巾をかぶった女を追う。

「草くん！止めなさい！」
気を失った帝に止めを刺そうとする少年の姿を発見し、藍は叫び声を上げる。

帝は多分、まだ麗さんを愛している。
自分を見る瞳は切なかった。

「殺したらだめ！」
藍は少し手加減をした気を作り、草に放つ。
「！？」

その気により草の体は吹き飛ばされる。その体はゆっくりと宙を舞い、草むらの中に倒れこんだ。
「帝様、大丈夫ですか？」
「麗…？違うな。藍か」
帝は目を開け、藍の姿を見ると皮肉気な笑みを浮かべた。
藍は胸がきゅっと痛くなる思いがしたが、目を閉じて草に向き直る。
「あれ？！」
しかし、草むらに倒れているはずの草の姿はそこにはなかった。

「？！」
凜を追い、宙を駆ける典に下から強力は気が放たれた。慌てて両手に気を溜め、それを防ぐ。手のひらがちりちりと痛み、気がぶつかりあうのがわかった。視界が白い靄に隠される。
靄が去り、周りを見渡す。
しかし、そこにはもう、凜の姿がなかった。

「明殿！」
麓から駆け登ってきた強は地面に伏せている女性の姿を見つけた。抱き起こすとそれが見知った宮の呪術師であることがわかる。色香が漂うなめまかしい明を強は苦手としていた。
「どうしたのだ？」
緊急事態に苦手とも言っていられないと強は明をじっと見つめてそう問う。
「強様…。帝が、帝を…」
明はそう言うと気を失う。
強は色香漂う呪術師を静かに地面に寝かせると、先を急いだ。

「藍…帝！」
典は眼下に帝と弟子の姿を見て安堵した。そしてゆっくりと着地し、帝の傷を確認する。
「典…。麗はわしの子供を身ごもっていたのだな。草か、あの少年、確かにそう名乗っていた」
着物を破り傷口に布を当てていた典はその言葉に顔色を変えると弟子を見る。そしてその表情を見て、帝が草に襲われたことを悟った。
「草か…。恨んでいるようだな。このわしを」
帝のつぶやきに誰も答えることはできなかった。

戦いが終わり、静寂が戻った山に鳥が戻ってきていた。穏やかな光が差し込む山の中に賑やかな鳥のさえずりだけが響いていた。

一

「海（カイ）。あなたの子。かわいいでしょ？」
銀色の長い髪に緑色の瞳の愛しい女性はそう言って海に笑いかけた。その腕には元気そうな赤子が抱かれている。柔らかな黒髪がうっすらと生え、大きな瞳は母親と同じ緑色だった。
「海。ねぇ。どうして探してくれなかったの？私ずっと待っていたのに。ずっとこの子と待っていたのに」

場面は展開する。

森の中で、成長した赤子が母親そっくりの緑色の瞳を海（カイ）に向けている。
「殺してやる！」
少年はその瞳に憎悪を湛え、海に向かって跳んだ。

「！」
海はそこで目が覚めた。
真っ暗な部屋の中にいることがわかる。

夢か…

海—帝は体を起こす。汗で着物が濡れていた。長い黒髪も同様で、帝はその気持ち悪い感触に目を細める。

夢…ではない。
確かに麗（レイ）の息子、わしの息子はわしを殺そうとしていた。

あの緑色の瞳に浮かんだ感情、それは憎悪のみだった。

麗が生きていたなんて思いもしなかった。
知っていれば、この手に抱きしめ、最後まで添い遂げたかった。
雁山(かりやま)の事件から数日が経過していた。
草(ソウ)のことは他言させないように関係者に申しつけた。
紫曼(しまん)の街から戻った典から4か月前に麗が病死したことを聞いた。
そして残された息子草を使い、何者かが自分の命を狙っている可能性があると報告を受けた。

自業自得だな。

帝は自虐的な笑みを浮かべると部屋を出る。部屋の前に待機していた警備兵を押しとどめ、帝は寝殿の外に出る。

美しい星空が上空に広がっていた。空気も澄んでおり、汗に濡れた体には心地よかった。

「あり得ない」
藍(ラン)はぶつぶつと文句を言いながら、宮内を歩いていた。部屋で寝ていたら、賢(ケン)が入ってきた。文句を言おうとしたら、明(ミン)に制止された。
そして部屋を追いだされた。
2人とも節操がなさすぎ！
藍達が宮を離れている間、2人の仲はかなり進展…。

進展しすぎてるようで、呪術司もあきれるほどのいちゃつきぶりだった。

呪術司の典(テン)が帰ってきた今、賢は強(キョウ)の部屋に泊まっているはずなのだが、突然明の部屋に入ってきた。藍は明の部屋に居候している身、文句もいえず、部屋を出る羽目になった。

野宿？

とぼとぼと歩いていると目の前に人の姿が見える。
暗闇で色彩がわからず、それが帝だとわかったのは呼び止められてからだった。

「麗…藍か…」
「帝様！」
藍は慌ててペコリと頭を下げる。
「どうした散歩か？」
「…はい」
部屋を追いだされたとは言えず、藍は曖昧に笑う。
「どうだ、わしと一緒に散歩しないか。眠れないのだ」
「…はい」
黒髪を降ろし、簡素な着物を羽織る姿は昼間の帝とは違う印象だった。

自分より相当上、典を同じ年頃であるはずの帝だが、こうしてみると自分より下の様に見えるほど華奢に見えた。

「藍。すまないな」
宮内の庭園をゆっくり歩きながら、帝はそうつぶやく。眉が潜められ、唇は痛みにたえるように閉じられていた。

「すまないなんて、そんな」
黒国の頂点に立つ帝にそう言われ、藍は恐縮して俯く。
その様子を帝は眩しそうに見た。
「藍…」
藍が顔を上げると帝の黒い瞳に中に苦悶の色を見て取る。

まだ好きなんだ。
麗さんのこと…

「藍。触れてもよいか」
「！？」
藍はぎょっとして目を見開く。その様子がおかしかったようで帝は笑いだした。
「すまない。冗談だ。さあ、そろそろ部屋に戻ろう。警備兵が心配しているはずだ」
「はい…」
くるりと方向を変えて歩き出す帝に藍は黙ってついていく。
麗の姿の自分に向けられる視線はとても苦しく、藍は胸が突かれるような気持ちになった。

「帝、藍殿？！」
帝と寝殿近くまで来ると、肩を落とす警備兵の隣に険しい表情の警備隊長の姿があった。

強さんってやっぱり警備隊長なんだ。
飛ぶのを怖がっている様子とはまったく違う。

「帝、おひとりで散歩など危険すぎます」
強は厳しい視線を帝に向ける。
「強、そう怒るではない。ほら、こうして優秀な呪術師も側にいた

のだ。安心するがよい」
「しかし…」
「わしは休むぞ。一晩歩き続けて疲れたのだ」
警備隊長にそれ以上小言を言わせないように帝は大きなあくびを見せる。
「藍。お前も休むがよい。付き合わせてすまなかったな」
愛しい女性と同じ姿を持つ藍に帝は穏やかに微笑むと部屋に入っていく。

強はため息とつくと、警備兵にしっかり警護するように言いつける。そして藍に目を向けた。

「藍殿。部屋まで送ろう」
「いや、いいですよ」
部屋に戻ったらとんでもない場面に遭遇するかもしれないと藍は両手を振って答える。
「いいから。藍殿」
そんな藍の腕を掴み、強は強引に歩き出した。
「強様！」
ずんずんと、警備兵の姿が見えたくなるまで歩くと強は藍の腕を離す。
「すまないな。さすがに部下の前では話せないし。兄さんが藍殿を部屋から追い出したのか？」
「！よくわかりますね。さすが弟さんだ！」
掴まれた腕をさすりながら藍は答える。
「藍殿？強く掴みすぎたか？すまないな」
それを見て強の顔が心配気に曇った。
「いつもの体じゃ、痛くないんですが、この体は痛みを感じやすいみたいで」
赤くなった腕を見せて藍は苦笑する。

「今度から気をつける……。藍殿」
無敵の警備隊長がそう言った後、言葉を詰まらせる。しかし覚悟を決めると再び口を開いた。
「一晩中外にいて疲れただろう。俺の部屋で休むといい」
「？！」

俺の部屋？！

藍が目を大きく開いて見ると男前の警備隊長はこほんと咳をした。
「そ、そんな意味ではない。俺はこれから用事で呪術部に向かう。部屋には戻らない。鍵をかけておけば邪魔するものはいない。明殿の部屋には兄さんがいるのだろう？寝ないわけにはいかないと思うのだが…」
「そうですね…」
藍はすこし顔が赤くなった男前の顔を見ながら苦笑する。
「じゃ、すみません。部屋を貸して下さい」
そうして藍は強の部屋で仮眠を取ることになった。

二

「ふーん。それで藍(ラン)は君の部屋にいるわけだ」
意味ありげに典(テン)は笑いながら強(キョウ)を見上げる。
「俺の部屋って、仮眠をとるところが必要だから、提供しただけだ」
「そう？君にしては親切だよね。やっぱり」
「典。ふざけるのを止めにして、草の行方はわかったのか？」
「全然～。でも私は黒幕は宮の中にいると思っている」
「そう思うか？」
「君もそう思う？」
２人の男が視線を交わし合う。その頭に浮かぶのは同じ人物だった。

現帝の叔父にあたる空(クウ)、
彼の招きで雁山に行ったこと、
帝が消えれば得をする人物、
襲撃の際に姿が見えなかったこと

それらの要素を考えれば、彼以外には黒幕は考えられなかった。

「しかし…証拠をどう取る？帝は空様に甘いからな。証拠なしじゃ信じないぞ」
「そうだね」
親友の言葉に典は手を頭に当て、考える。

空は２５歳、現帝の海(カイ)より７歳年下だ。
前々帝は第一正妻が崩御し、若い黒族の女性を第二正妻として向かえた。前々帝がなくなる直前に生まれた空とその兄の前帝とは親子のような歳の差で、前帝は空を弟とは認めることはなかった。事

あるごとに空とその母に辛く当たる前帝から二人を庇ったのが現帝の海だ。現帝は叔父である空を自分の弟のように愛情を持って接していた。
しかし空は狐のような男だった。姿は海と類似しているのに、雰囲気はまるで異なった。穏やかに見えるのだが、その本心はいつもその笑顔の裏にあるような男だった。

「空様の別荘を当たるか？」
「すでに当たった。しかし蛻の空だった」
「そう簡単に尻尾は掴ませないか」
「そう。頭にくるけどね」
「さあ、どうする？」
「実は私にいい考えがある」

「え！！」
正午すぎ、どんどんと扉を叩かれた。
開けて見るとそれは典と申し訳なさそうな顔をしている強だった。
そして寝ぼけた頭を一気に覚醒させたのが師のとんでもない話だった。

「無理です。無理！！」
典に聞かされた話とは、帝の愛妾の振りをするというものだった。
「大丈夫だ。帝もそう節操のないかたではない。君の腕を買って言ってるんだ。君なら帝を完璧に守れる」
師はその緑色の瞳をじっと向ける。
「でも、私そういうのって、全然向いてないですよ。無理ですよ」
こういうってお色気たっぷりの人がやったほうがいいよね。
私じゃ無理無理。

「大丈夫。明がそう言うのは詳しいから」
「嫌、でも…」
「藍、これは草をおびき出す作戦でもあるんだ。麗に似た君が帝の側にいるなら、草が絶対に何かをしかけてくるはずだ。それを狙う」

草くん…
確かにお母さんそっくりの私が帝の愛妾とかで側にいたら何か仕掛けてきそうだ。
草くんの手掛かりも見つかってないし、しょうがないか。
嫌だけど、元に戻りたいし。
振りだけだし……

「わかりました。私やります」
「そうか、よかった！じゃ、今から一刻で簡単な宮の礼儀などを明から教わってくれ。何も知らないんじゃ、内所（ないどころ）などに小言をもらうからね」
「え～！！」
「それが終わったら、愛妾に相応しい正装してと…」
「え～！！」
「じゃ、頑張ってくれ。私達は他にやることがあるから」
不満そうな藍にひらひらと手を振ると典は部屋を出ていく。
「強？」
部屋を共に出ようとしない強に典が声をかける。男前の警備隊長は眉をハの字にして、頭を抱えている藍を見ていた。
「藍殿、まあ。しばらくの我慢だ。何かあったら俺が側にいる」
「そ、そうですね！それは助かります」
その言葉に、藍ははっと我に返り表情を笑顔に変えた。可愛らしい笑顔を向けられ強はちょっと照れた様子をみせると「では、また」と親友の後を追う。

「強。やっぱり君は藍が好きなんだね」
「そ、そんなことは！」
「じゃ、嫌いなの？」
「……」
「まあ、帝の側に送ること心配だろうけど、帝もそう節操のない人じゃないし、中身は藍だから大丈夫だよ」
黙っている親友が悩んでいると思い、典はその肩を軽く叩く。
「あーでも、君は今の藍が好きなのかあ？じゃあ、元に戻ったら残念だね」
「そ、そんなわけない。藍殿は藍殿だ」
咄嗟にそう答えた強に典はしてやったりと笑顔を浮かべる。
「素直じゃないんだから。警備隊長殿は」
「典！」
「怒らない。怒らない。さあ、私達は次の大戦に向けての準備だ。わかってるね」
「もちろんだ」
美しき宮の呪術司と男前の警備隊長は表情を切り返ると、草達を迎え撃つ準備のため、呪術部に向かった。

三

「紺（コン）。何か用かい？急に呼びだして？」
「そうだぜ」
宮京の南に位置する森の中で三人の男女が話をしている。
1人は頭を剃りあげた背の高いがっちりした壮年の男――紺（コン）。
紺の向かいの木を背に立つのが、胸が見えるのではないかと思われるほど胸元を開き、黄土色と茶色の豹柄模様の着物を身につける女――桂（ケイ）。女は深紅の口紅をつけ、真っ白なおしろいを顔じゅうにはたきつけている。その美しさは見る者を惑わすような妖しげなものであった。
桂が寄りかかる木に登っている男は呆（ホウ）。背が低く、褐色の肌に、焦げ茶の髪の毛、体毛も同じ色で着物を羽織っていなければ本物の猿のような見える男であった。
紺はこの二人とは昔からの顔見知りだった。二人は闇の呪術師と俗に呼ばれており、呪いをかけることを専門としている呪術師であった。
「帝を殺す手伝いをしてほしい」
「？！」
紺から放れた言葉に二人の顔が曇る。
「任務完了後は、お前達は正式な宮の呪術師として扱われる」
桂と呆は数十年前、典が呪術部に入部する前に呪術部で学んでいた呪術師だった。当時の呪術司に破門に近い形で追いだされた二人は長い間、闇の呪術師として日の当らない場所で生きてきた。
「あたい達がそんな条件信じると思うのかい？」
「そうだ、そうだ」
呆は木の上から跳び下りると紺に向かって歯をむき出す。
「お前達が乗らないならいいだろう。元より期待はしてなかった」
「待ちな！」

くるりと背を向けた紺に桂が慌てて声をかける。
「何も、話に乗らないとは言ってないんだろう？勝算はあるんだろうね。今の呪術司は腕がたつと利いてるからね。勝算がない戦はしないよ」
「勝算はある。いい駒も持っているからな」

「凜（リン）様、次はいつなんですか？」
黒髪の少年は苛立ち混じりにそう聞く。
雁山の襲撃は失敗に終わったが、紺の助けでどうにか宮の追及から逃げることができた。しかし　あの日以来、草（ソウ）の苛立ちは日増しに募るばかりのようだった。

帝を殺そうとした瞬間に現れた女性は、母親と同じ姿で、自分に攻撃を仕掛けた。
帝を守るその様子が、まるで帝の殺そうとする自分を母が責めているように見え、少年の気持ちを苛立たせていた。

間違っていない。
母さんは俺を同じ気持ちのはずだ。

あの女—母さんそっくりの女は宮の呪術師だ。
母さんじゃない！

「草！」
鋭い口調でそう名を呼び、師の南の呪術師は草の肩を掴む。
「落ちつけ。機会を窺うんだ。わかったな」
凜の青い冷たい瞳に見つめられ、少年の心が幾分落ちつきを取り戻す。
「草。私が稽古をつけてやろう。次回は宮の呪術司との戦いだ。少

しでも腕を上げておいたほうがいい」
「…お願いします」

じっと部屋にいるより体を動かしていた方がましだった。
金髪の女性呪術師にまったく歯が立たなかった。
凜いわく、あの呪術師は全然格下の腕らしい。

草は自分がまだまだ未熟であることが悔しかった。

庭に出て、師匠と弟子は距離を置き、向かい合う。

少年の緑色の瞳に焦りをみせとり、凜は息を小さく吐く。

焦りは禁物だ。焦りは隙を生む。

「草、行くぞ」
氷の呪術師と呼ばれる美しい白髪の師匠は未熟な弟子を見つめる。
そして刀を抜くと飛んだ。

「ほら、いい感じよ」
明(ミン)に化粧を施され、鮮やかな着物を着せられた藍(ラン)は鏡の中でぎこちない笑顔を浮かべる美しい女性を凝視する。信じられないが自分だった。
「やっぱり元がいいからね〜」
「言われなくてもわかってます」
藍の今の体は麗(レイ)の同じだ。
だから元ということば藍ではなく麗を指す。
師がにやにやと笑いながら褒めても、それは嫌味以外に何物でも

なかった。
その隣の強(キョウ)はどうやら藍に見とれているようだった。
ふん。どうせ。
麗さんの姿だからね～。
藍は普段着なれない重い着物、化粧で息が苦しくなり、顔を歪める。
「藍ちゃん、せっかくの顔がもったいない。笑顔笑顔」
明とじゃれていた賢(ケン)がふと顔を上げ、そう言う。
この難破な呪術師め！
藍はその言葉にますます顔を険しくさせる。
「藍～。お化粧が崩れちゃうから。やめてよね」
賢の隣できゃきゃっと笑いながら明も同調する。
あーもうやってられない。
典(テン)も強も同じ感想らしく、呆れた表情を二人に向けている。しかし、二人はまったく世界に入ってて気がついていないようだった。
「さて、あほな者たちはほっといて、藍、帝のところへ行くよ」
「あほ？失礼なこというな。典」
「典様。その言い方はないと思います」
二人がむっとして典を見る。
「あほはあほ。さ、二人とも、用事は済んだ。別の仕事があるだろう？ここで油を売ってないで帰ってくれ」
冷たい言葉でそういわれ、二人はぶつぶつ言いながら外に出て行

く。
「よし、邪魔者は消えたね。さて、藍、準備はいいかい？」
二人が出て行き、幾分ほっとしたような表情を浮かべて典は美しく変身した弟子に問う。
「やっぱり、行かないといけないですか？」
藍は師と同じ緑色の瞳に不安の色を浮かべる。

藍だって女である。
男女のことは知っている。
そして今の自分の姿は帝の元の恋人麗だ。

早朝に見た切ない瞳は藍の心をかき乱す。

でも私は麗さんじゃないし。
大丈夫だよね。

「藍。大丈夫だって。帝だって、中身が藍だってわかってるし。まあ。君が望むならしょうがないけど」

「冗談じゃないですよ！そんなこと絶対にありえません」
「そう、それならいいよね。よかったね、強」
「よかったって！俺に振るな」

ふいに話を振られ、男前の警備隊長は顔を赤くする。
それを見て藍は小さなため息をついた。

どうせ、強さんが意識してるのはこの体のせいだろうな～。
所詮、人間見た目が一番だからね。

あー！草くんを早くみつけて、元に戻して貰おう。

でも、宮に草くんが拘束されたらどうなるんだろう？
処罰？でも帝の子供だよ。

「藍。行くよ」
考えごとをしている藍に典がそう声をかける。
「はい、行きっ！」
藍は慌てて部屋を出ようとして、着物の裾を踏む。バランスを崩したところを支えたのは強だった。
「あ、ありがとうございます」
「礼は必要ない。藍殿。帝はわきまえた方だ。大丈夫だ。安心しろ」
警備隊長は支えた藍の体から手を離しながらそう言う。
「そうですね。はい」

ちかくにはいつも強様もいるし、間違いはないはず。
問題は草くんか。

藍はぺこりと強に頭を下げると典の後を追った。

四

「麗(レイ)…」

帝は現れた藍(ラン)を見るとその名を呼び、息を呑む。しかし、次の瞬間、ふわりと笑うと藍達の前を遮る布を巻き上げるように指示し、奥から姿を見せた。

「藍……。典(テン)から話は聞いておる。これからしばらくよろしく頼むぞ。お前の部屋は一時的にわしの寝殿の中に用意しておる」

寝殿?!

顔を引きつらせた藍を師は面白そうに見つめ、帝は安心させるように微笑む。

「もちろん。寝室はわしとは別だ。安心するがよい」

「はあ…ありがとうございます」

ここでありがとうとお礼を言っていいかわからなかったが、とりあえず藍は安堵の息を吐く。

「さて、帝。明日は愛妾の御披露目を考えております。よろしいでしょうか?」

「ああ、かまわぬ。式所と話を進めるのだ」

御披露目???

聞いてないですけど?

「あ、すまないね。言うのを忘れていたっけ?明日は御披露目だから。がんばってね。今日はその分休むといいよ。寝殿なんてめったに泊まれないところだから楽しんでおいで。内所(ないどころ)、粗相があると思うけどよろしくね」

粗相とか。
お披露目とか、
え？？？？

藍の驚きをよそに、内所と呼ばれたかっぷくのよい女性は美しい呪術司の笑顔に気をよくしてうなずく。
「呪術司殿。ご安心ください。この私がばしばしと鍛えてあげますから」

ひえぇえぇ。
そういえばこのおばちゃん、怖かったんだよね。

藍はやる気を起こす内所をちらっと見る。

「内所。藍は正式な愛妾ではないのだ。そう張り切ることもないだろう」
「しっかし」
「帝。正式といわずとも明日はお披露目です。内所に少しぐらい鍛えてもらったほうが助かります」
「そうか？」
「そうですよ。帝」

この意地悪！！

にんまりと笑う師に藍は鋭い視線を向ける。
本当は怒鳴り返したいところだが、帝と怖い内所の手前そういうわけにもいかなかった。

「さあ。藍殿。呪術司殿もそう言っております。明日に備えて私が

みっちり礼儀作法を教えてあげますよ。帝、よろしいですか？」
「かまわぬ。しかし…」
「帝、藍なら大丈夫ですよ」

大丈夫じゃないんですけど？！

「さ、藍殿。行きますよ。帝、私の代わりに宮所を呼んでおきます。それでは失礼いたします」
ぐいっと藍の腕を掴むと内所は帝に深々と頭を下げる。そして戸惑う藍を引きずるようにして連れて行く。

典様〜〜！！

救いを求めるように師を見るが、典は楽しそうな笑顔で手を振るだけであった。

元に戻ったら、絶対に絶対に変な呪いかけてやる〜〜。

視界の隅に消え行く師の笑顔を見ながら藍はそう心に誓った。

疲れた……

二刻後、藍は寝殿の自分に与えられた部屋に戻ってきていた。
明に教えてもらったのだが、内所にかかればなってないのもいいところで、藍はパシッと扇子で指先を叩かれながら礼儀作法をみっちり教わった。
講義から開放されたのはすっかり闇が宮を覆ったころだった。夕

飯を内所と一緒にしたのだが、作法、作法といわれながら食べたので食べた気がしてなかった。

とりあえず疲れたし、明日は朝から街に繰り出すって言ってから、寝よ。

藍は羽織っていた重い鮮やかな着物を脱ぐと立てかける。

通常であれば世話をするものがいるのだが、藍は面倒だったのですでに帰ってもらっていた。

下着の役割をする薄い着物だけになると、藍はほっとして腰を下ろす。

敷かれた布団に横になり、寝ようとしたところ、トントンと襖が叩かれる。

「藍。わしだ。寝てしまったか？」

「帝様？！」

藍がぎょっとすると布団から体を起こす。そしてあたふたと脱いだ着物を羽織る。

そのまま応対するにはあまりにもだらしなかった。

「寝てしまっていたんだな。すまなかったな」

乱れた髪、適当に羽織った着物の様子でわかったらしく、帝はそう言った。

「いやいいですけど。どうしたんですか？」

そう答えながら藍はふと内所の言葉がよぎる口をふさぐ。

言葉使い、言葉使い。

「藍。気にしなくてもよい。今は二人だけなのだから」
二人？！
二人ってぇえええ！！
目をぱちくりさせ慄く藍に帝は笑いだす。
「藍。誤解するではない。わしはそういう意味でいったわけではないのだから。その姿を見ると確かに触れたくなるが、お前が麗じゃないことはわかっておる。安心するがよい」
「…はい。すみません。ありがとうございます」
訳のわからぬ返事をして、かしこまる仮の愛妾に帝は麗と異なる可愛らしさを見出す。しかし、彼女の立場を考え、節操のない自分の心を叱咤し、自嘲した。
「帝？」
「すまぬな。藍。……わしは頼みがあってきたのだ。わしの散策に少し付き合ってくれぬか？」
こちらを伺うようなしぐさの帝に藍の胸がどきっとする。この国の頂点に立つものでありながら、今目の前にいるのは同世代の普通の青年のようだった。
同世代ではないのだが、その華奢な体、髪を下ろすと幼く見えるその顔が藍に錯覚を与えていた。
「……もちろん。いいですよ」
藍がにっこりと笑うと帝は一瞬驚いた顔を見せる。しかし、微笑を浮かべると立ち上がった。

藍殿？帝？
夜の警備を部下に任せ、自室の戻ろうとした強（キョウ）の視線の先に、帝と藍の姿が見えた。

またこんな時間に！

苦言を言っておかねばと足を踏み出したが、二人の楽しそうな様子に足を止める。

感じたこともない息苦しさに襲われる。

それは胸を刺されるような痛みで、強は眉を潜めた。

『藍のこと好きなんだろう？』

親友の言葉を浮かび、強は首を横に振る。

そんなわけがない。

警備隊長の俺がそんな思いを抱くなんて。

強は空を見上げ、深く息を吸う。

頭上には落ちてきそうなくらい星が輝いており、強はまぶしくもないのに目を閉じる。

息を吐き、再び前を見ると二人の姿は消えていた。

五

翌朝、宮の大門が開かれ、鮮やかな着物を着た者たちが大きな扇を持って出てきた。何事と街の人たちは視線を向ける。

すると式所（しきどころ）が出てきて、帝が愛妾を取ることをつげた。わっと民衆が沸くと、にぎやかな管楽器と打楽器の演奏が聞こえ、煌びやかな神輿が大門から登場した。神輿は色とりどりの花々、布で飾られ、乗っているのは帝と昨日から愛妾となった銀色の髪に緑色の瞳に女性だった。

女性はもちろん藍（ラン）なのだが、街の人々はそれはそれは可愛らしい愛妾に目を奪われ、歓迎する様子だった。

帝が正妻以外に愛妾を取ることはまれではなかった。現帝では初めてになるが、愛妾にふさわしい様相にそれが芝居であることを気づくものはなかった。

神輿の側には麗しい宮の呪術司が微笑を浮かべて付き添っていた。そしてその反対側には男前の警備隊長が凛々しい面持ちで歩いている。

神輿の後には警備兵たちが続き、その後ろには楽隊が続く。行列の後ろにはこれまた造形の美しい賢（ケン）と明（ミン）が街の人たちに笑顔を振りまきながら歩いている。他の華やかな呪術師達も行列に加わり、今回の愛妾の御披露目は盛大に行われていた。

「おい、ぼうっとしてないで、来いよ。帝様が愛妾を取ることになったみたいだぜ。今お披露目をしてるぞ」

「本当か？！」

朝食にと立ち寄った料理屋でそんな会話が聞こえ、男達がどかどかと外に出ていく。

「愛妾？」
運ばれてきた麺に手をつけようとしていた草（ソウ）は箸を机の上に置く。
「草！」
その表情に嫌な予感を感じたが、凜（リン）が止めるよりも先に草は椅子から立ち上がり、男達を追った。
「ちょっと、お嬢さん。飯代！」
弟子を追って店を出ようとする凜の腕を、小汚い前掛けをつけた男が掴む。
氷の呪術師はぎろりと睨みつけるとその腕を振り払い、懐から金の小さな塊を出す。
「毎度～」
男のにやけた顔を侮蔑し、凜は足早に店を出た。
周りを見渡し、少年が屋根の上に登り、通り過ぎる行列を見下ろしているのがわかった。凜は目立たないように、裏通りに回り込み、屋根に登る。
屋根の上の草は師がすぐ側に上がってきたのも気付かず、神輿を凝視していた。
神輿には帝と愛妾の姿がある。愛妾は少年の母と同じ姿の藍だ。美しく着飾り眩しいほどだった。
「草！」
飛び出そうとする草の動きがわかり、凜がその口を塞ぎ、体を屋根に押し付け押さえる。

神輿の傍には呪術司と警備隊長の姿があった。罠であるのは確かだった。このまま飛び込むと確実に掴まる。
南の呪術師は腕の中で暴れる少年の首元に手刀を叩きこむ。そして周りを見渡し、誰もみていないことを確認すると気を失ったその体を肩に担ぎ、屋根伝えに行列から離れた。

目覚めた草が怒り狂うのはわかっていたが、みすみす罠にはまる

つもりはなかった。

六

「はあ……」
街を二刻の間、練り歩き、昼食を取ることになった。
今日は一日駆けて宮京を回る予定だった。
頭痛がするような頭の大きな飾り、重い着物を着た藍（ラン）は、心底疲れていた。普段しない艶やかな微笑というものを強要され、顔の筋肉も強張っているようだった。
「藍、大丈夫か？」
この新しい愛妾が偽装ということを知っているのはごく少数だけだ。そのため、帝は部屋に誰も立ち入らないように申し伝えていた。
「大丈夫です」
藍はそう答える。実は帝を離れて１人で休憩したかったのだが、そう言うことができるわけもなく、藍は居心地悪さを感じながら座敷に座りこんでいた。

「帝」
「入ってよいぞ」
金色の髪の美しき呪術司が姿を見せ、藍は安堵の息を漏らす。
「藍。うまく演技してたね。君にしてはすごいよ」

君にしてはって？！

そう思いながらも藍は帝の手前、視線だけをぎらりと典に向ける。
「帝。昼食後、ここから右手に宮京を周り、宮に戻る予定です。仕掛けて来るとしたらその時かもしれません」
師は弟子の鋭い視線を笑みで返し、帝に顔を向ける。
「そうか。草…は仕掛けて来るか？」
「多分」

典の言葉の後に重い沈黙が流れる。
藍はそっと帝の表情を窺った。

自分の実の子に命を狙われるっていい気持ちじゃないよね。
しかも愛した人の子だし。
どうにかできないかな…

「藍。そういうことで昼からもその調子で頼むよ。私はやることがあるからまたね。帝、半刻後、ここを発ちますがよろしいでしょうか？」
「わかった。お前に任せる」
「それでは失礼します」
師は一礼すると部屋を出ていく。

あー出ていちゃった。
なんだか2人ってつらいんですけど。

でも帝はどんな気持ちなんだろう。
愛した人と同じ姿の人が側にいて。
もしかしたら嫌かもなあ。

「帝様……。私、少し席をはずしましょうか？大丈夫ですか？」
「藍…。大丈夫だ。気にせずともよい」

うーん。気になる。

藍はそう思いながらも、帝にそう答えられ席を外すわけにもいかず、沈黙の中で目の前に並ぶ、豪華な御膳に視線を向ける。
「藍。さあ、食べるのだ。昼からもまた頑張ってもらわぬといかぬからな」

短い間だが、藍の気質がわかった帝は相当無理して、麗しい愛妾の演技をしている若い呪術師を気遣う。
「すみません。いただきます～」
帝の気遣いもあり、藍は空元気でそう言うと箸を持つ。
「帝、これおいしいです！」
おずおずと食事を始めた藍はその美味な味付けに感動を覚えた。そして、先ほどまでの緊張が嘘のように食事に没頭し始めた。
帝は愛しい人の同じ姿をしながらまったく別の性格の藍を眩しそうに見つめる。
当の藍はそんな視線にも気付かず、めったに食べられない宮の豪勢な御膳を味わっていた。

「凜（リン）様！離してください！例え罠でも俺は行く。帝をぶち殺す。俺に見せびらかすように母さんそっくりの呪術師を愛妾として披露するなんて許せない！」
「草（ソウ）！」
隠れ家に草を連れ帰って、すぐに少年を目を覚ました。そして屋敷を出て行こうと暴れ始めた。
「冷静になれ。計画なしじゃ、ただ掴まるだけだ。帝を狙ったものとして打ち首になるぞ」
「打ち首？」
「そうだ。お前は多分帝の息子として扱われることはないだろう。帝の命を狙った輩として処罰される」
「…そ、そんなの。怖くないです。小さい時から父さんは死んだものを思っていた。だから今さら父さんなんていらない。ただ奴に思い知らせてやりたいだけなんです！」
「ふーん。そうか、そうなんだ」
「なるほどな。泣ける話じぇねーか」

ふとそんな声が聞こえ、すとんと音がして人影が部屋の外に見える。
「何者だ！」
興奮している草の前に立ち、凜は刀に握り、襖を開ける。
「お、おっかねぇ！」
「ちょっと。あぶないじゃないか！」
「桂（ケイ）、呆（ホウ）！なんで貴様達が！？」
二人の姿を確認した南の呪術師は顔をしかめる。
悪評高い闇の呪術師の桂（ケイ）と呆（ホウ）は、表の呪術師凜にとっては天敵のような存在だった。
「凜、刀を納めろ。この二人は協力者だ。敵ではない」
桂と呆の背後に現れた紺（コン）が凜にそう命じる。
「協力者？！」
凜は紺の言葉に眉を潜める。二人は凜の驚きをあざ笑うかのようにケラケラと笑う。
「そう、一緒に帝を殺そうぜ。南の呪術師様よ」
「そうそう。あたい達と一緒にさあ」
にやけた表情の二人に凜は切りかかりたいと衝動を押さえる。紺の言葉は空（クウ）の言葉だった。紺は空の忠実な部下であり、彼が裏切ることなどありえなかった。
「凜様…」
苛立ちを隠せない様子の師匠の後ろで草は突如現れた二人を見つめる。先ほどまでの怒りや焦りはすでにどこかに行っていた。それほど目の前の男女の様子は奇妙で、とてもでないが善人には見ない者たちだった。
「草。安心しろ。例え何があってもお前がだけは私が守るから」
少年の心配を感じとり、凜は刀を納めながらも草を背中に庇う。
「おやおや、凜さんよ。お母さんみたいだね」
「ぼっちゃん、お父さんを殺すんじゃなかったのかい？」
二人の挑発するような言葉に凜と草の波動が変わる。しかし凜達

が行動を取るより早く動いたのは紺だった。
　しゅんと風が吹き、二人の間を鋭い刃物が掠る。桂の頬が少しきれ、呆の髭がすこし削がれる。
「な、なんてことしやがるんだ。紺！」
「この野郎！」
「いい加減にしろ。桂、呆！争っている場合ではない。俺達の目的は帝を殺すことだ。それ以外のことは目的を達してからにしろ！」
　紺の恫喝に二人は不満そうだが黙る。
「凜。お前もだ。わかったな」
「ああ」
　凜の返事を聞き、紺は懐から紙を取り出す。それは宮京の地図であった。
「愛妾のお披露目がされているのは知っているな？」
「ああ」
「俺達はそれを襲う」
「罠だぞ」
「わかってる」
「空の指示なのか？」
「ああ」
　紺の肯定に凜は眉を潜める。
　罠とわかっていて跳び込む。そんな馬鹿なこと考えれなかった。
　しかし、凜は空の思い通りにしか動けない。

「行列はここを抜け、宮に戻る。ここは人通りが多く、視界が悪い。狙うにはうってつけの場所だ」
　紺が凜の考えを他所に縁側に地図を広げそう説明する。とりあえず集められた者たちは大人しくそれを聞いていた。
「雑魚には構うな。桂と呆、お前達は呪術師を。凜は呪術司、俺は警備隊長を狙う。そして草。お前は帝だ。わかったな」
「紺、帝の側には愛妾の振りをした呪術師がいる。草に荷が重い」

「大丈夫だ。俺が警備隊長を片付けた後、援護に回る。お前も草を援護したければさっさと呪術司を片づけるんだな」
「紺！」
「凜様。俺大丈夫です。母さんの姿で愛妾の振りをする女は許せない。帝と一緒に殺してやる」
「草！」
「そういうことだ。凜。話は以上だ。現場に向かうぞ」
不服そうな凜に冷たい視線を向けると紺は縁側に広げた地図を乱暴に掴む。
「凜様。俺大丈夫ですから！」
空は何を考えてるんだ？
気合を入れる弟子を見、凜は愛しい人にそう心の中で問う。
あの女性呪術師の力は確かだ。とてもでないが草に敵う相手ではない。
しかし空はそれを望んでる。
凜は嫌な予感を覚えながら空を見上げる。
雲ひとつない青い空が頭上に広がる。空の上で太陽は真上に輝き、高見の見物をするのにうってつけだった。

七

昼食休憩を終え、行列は再び動き始めた。
おなかいっぱいになった藍(ラン)は不覚にも神輿の上でうつらうつらしそうになるのをこらえて、愛妾らしい艶美な笑みを浮かべていた。

ふいにパシパシっつはじける音がして、警備兵と呪術師が騒ぎ始める。そして同時に白い煙が発生した。
「?!」
異常事態に藍は目が冴え、腰を上げ、帝を守るようにその前に立つ。

街の人たちも急に視界が白く曇り、不安な叫び声を上げる。

「気をつけろ!」
警備隊長がそう声を出して警備兵に注意を促す。
「藍。帝のこと頼んだよ」
呪術司は振り向きざまにそう言うと一気に空に舞い上がる。煙を気で一気に払うつもりだった。
「?!」
しかし空高く上がった典(テン)を待っていたのは紫の頭巾をかぶった女性だった。
「呪術司。私がお相手しよう」
その声に典は記憶が揺さぶられる。頭巾から覗く冷たい青い瞳は過去に憧れた女性に類似していた。
「……凛(リン)…なのか?」
「…意外だな。わかるのか?私のことを覚えているのは驚きだ。20年も前のことなのに」
凛は目を細めてそういった。

「なんで、君が。君は南の呪術師じゃないか。なんで」
宮の美しき呪術司は過去に共に呪術部で学び、自分の憧れの対象であった有能な呪術師がなぜ帝を狙う手伝いをしているのかと怪訝な表情を浮かべていた。
「あなたには関係がないこと。さあ、呪術司よ。その力みせてもらおう」
氷の呪術師はいつものように冷たい声でそう答えると刀を抜いた。
「君と戦いたくはないんだけど。しょうがない」
典は息を小さく吐くと同様に刀を抜き、構えた。

典が空に消えた同時に、紺(コン)たちの襲撃が始まった。
視界が悪い中、混乱する街の人々に混じり、桂(ケイ)と呆(ホウ)がまず力を放った。
「明ちゃん！」
白い煙の中、気が行列に打ち込まれる。明がそれを受け、吹き飛ばされる。数人の警備兵の体も同じように宙を舞った。
「大丈夫です」
煙の中から明がそう答え、姿を現す。気を受けた衝撃で着物が破れ、手足にかすり傷を負っていたが、魅惑の呪術師は無事であった。
「よかった…」
賢(ケン)はほっとして、明に駆け寄ろうとする。しかし、東の呪術師は猿のような男――呆によって止められる。
「おっと、色男さんよ。恋人とはあの世で楽しんでもらおうか」
「呆！？」
白い煙の中、視界は悪かったが至近距離で相手の顔を確認することはできた。難破な賢と言えども、一応東の呪術師である。呆のような性悪な闇の呪術師とは何度が対戦したことがあった。
「あ！誰かと思ったら。東の呪術師だな。相変わらずむかつく面してるぜ」

「そういう君も相変わらず猿顔だよね～」
呆の言葉に賢はにっこり笑ってそう言い返す。
彼が自分の姿を気にしているのは知っていた。東の呪術師はこれまで対戦した経験を生かし、怒りによって相手の冷静さを奪うつもりだった。
「くそ、その口ひんまげてやる！」
案の定、呆は怒りで顔を真っ赤にし、小刀を二つ腰から抜くと飛び掛った。
賢は猿男の背後で明に切りかかる別の闇の呪術師の姿を確認した。しかしこの状況ではここから動けるはずがなく、恋人の身を案じながらも向かい打つため刀を抜く。
「待ってて、明ちゃん。すぐに僕が助けてあげるから」
「なにほざいていやがるんだ！」
囁くような賢のつぶやきは呆には聞こえなかった。色男でむかつく呪術師をぶちのめす、その思いを胸に猿男は小刀を振り下ろした。

真っ白な視界の中で警備兵や呪術師のうめき声が聞こえた。帝の側にいる強は刀を手に、今か今かと敵が現れるのを待つ。
そして現れた男は強と同じくらいの背格好の男だった。頭巾をかぶっており、その顔を見えなかった。力を使っていることから呪術師であることがわかる。
「草！行け」
背後に紺が呼びかけると少年が煙の中から姿を現し神輿の上に飛び乗る。
「帝、藍殿！」
強は助けに回ろうとするが、紺から放たれた気によって止められる。
「お前の相手は俺だ」
男の灰色の瞳が強を捕らえる。警備隊長は隙のない男の様子に久

々に緊張を覚える。しかし全力で戦える喜びも感じていた。
藍の力は知っており、それは信用にたるものだ。
大丈夫だ。藍殿なら帝を完璧に守れる。
強は刀を抜くと紺に向かい合った。

「この野郎！母さんの姿で愛妾なんてなりやがって！」
「草くん！」
神輿に飛び乗ってきた少年は憎悪の目で藍と帝を見ていた。

それは怒るわよね。
ごめん。でも

「草くん。帝を憎むのは筋が間違ってる。だって帝は知らなかったんだもん！」
「うるさい、母さんの姿でそんなこと言うな！」
少年は気をためると藍に放つ。呪術司の弟子は若い呪術師の気を片手で簡単にはじく。
「話し合いましょう。それが一番なんだから！」
「黙れ！黙れ！」
自分の攻撃が簡単に跳ね返され、草は愕然とする。しかし、怒りは増長するばかりだった。
少年は気を放つと同時に帝に向かって飛ぶ。
「だから、話を聞きなさい！」
藍は気をはじくと草の前に立ちふさがり、その体を床に押し付ける。そして髪をまとめていたい紐を解くと、その手を拘束する。
「動かないで。帝、草くんとちょっと話したほうが…」

少年の暴れる体を抑えながら、藍は背後にいたはずの帝を見る。しかし、そこには立派な腰掛しかなく、その主の姿は消えていた。

「空（クウ）！ここから出せ！」

草と藍が戦っている隙に帝をその場から連れ出したのその叔父の空だった。

空は背後に回り帝を気絶させると私兵を使い、屋敷に連れこんだ。

「海（カイ）。悪いけど。僕は君が死ぬまでここから出す気はない。殺そうかとも思ったんだけど、優しい甥を殺すのは僕としても気が咎めるからね」

地下牢の木製の柵の奥から自分を睨みつける帝――海に空は歌うようにそう言う。

「どうするつもりなのだ？」

「そうだね。君には宮から消えてもらう。消えた帝の代わりに継承権のある僕が帝になるの」

「草をどうするつもりだ？」

「草？もちろん、打ち首。だって帝を狙ったものだよ。どうせなら帝を殺した罪でも着せようかな」

「空！お前はなぜそのような……」

「なぜ？海。君に僕の苦しみがわかるかい。帝の子供でありながら蔑まれる僕の気持ちが……」

「……すまない。わしの父上のせいで」

「君に謝ってもらってもしょうがない。帝になってみなにわからせるんだ。君はそこで僕がすることを見ているといいよ」

「空！」

自分に背を向けた空に海は呼びかける。

「頼む。草だけは草だけは助けてくれ。あの子には何も罪はないだろう？」

「……どうしようかなあ」
空は甥に背を向けたまま、笑う。
「空！」
「僕はそういう君が嫌いなんだ。草は残念ながら打ち首だ。またね」
「空！」
海の悲痛な叫びは叔父には届かなかった。
空は甥に再び顔を向けることなく、地下牢を足早に去る。悲痛な声で自分が呼ばれるのがわかったが、そんなものどうでもよかった。

一

「私はわかるんですけど、なんで呪術司の典様まで掴まるんでしょうか？」
「それは私は聞きたいくらいだ」

愛妾お披露目の途中に、帝が姿を消した。
疑いは愛妾である藍に向けられた。
帝を襲った草は掴まり、呪術司と戦っていた凜は草の身を案じ、自ら投降した。

草と戦っている間に帝を失い、藍は悔恨の思いでいっぱいだった。責めを受けても仕方がないと諦めていた。しかし、師の典が牢屋に姿を見せた時、何か陰謀の匂いを感じた。

「典様の何の罪なんですか？」
「共謀罪だってさ。弟子の君を使って帝をたぶらかし、誘拐した罪だって言ってたけど」
「…おもしろいことになってますね」
「そうだね」

師と弟子は鉄の柵越しにお互いの顔を見つめる。
草と凜は別の場所に拘束されているようだった。

帝が何者かによってさらわれたというのに、宮は藍達を拘束するだけで、その捜索には力をいれていないように見えた。

「典、藍殿」
そうふいに声がして、男前の警備隊長が現れる。その表情は硬い

ものだった。
「宮がおかしいことになっている。父上…将軍が何者かに操られているようだ」
「将軍が！」
親友の言葉に典の顔が曇る。
帝の次ぎに権力があるのが軍部の長である将軍だ。将軍は強（キョウ）の父親で帝の警備は強に任せていて、外部の軍の統一や呪術部との連携など担当していた。
帝が消えた今、強と共にその捜索に当たっているはずなのだが……
「臨時の帝に空（クウ）様が即位した」
「？！そんなに早く？」
「ああ、そしてお前の後任は紺（コン）という呪術師だ」

「おもしろいね」
典は目を細めて後に微笑む。
空が帝―海（カイ）を誘拐し、宮の上層部を何らかの手を使い、操っている。
わかりやすい話だが、危険な状態だった。
「典、藍殿。俺は表だってお前達を助けることができない。宮の上層部がおかしい。下手に動くと俺も拘束される」
「強様が？！だって警備隊長ですよ！」
「それでもだ」
信じられない。
藍は起きていることが信じられなかった。
しかし、藍の向かいの牢に入っている典は楽しげだ。
「典？何か策があるのか？」

危機的状況のはずなのだが、全然焦っていない、むしろ面白そうな表情を浮かべる典に強が眉を潜める。
「私と藍は警備隊長を襲い、脱走。そして帝の救出に向かうっていうのはどう？」
「帝は生きてるのか？」
「多分ね。空は帝を殺せない。だからどこかに幽閉されているはずだ」
「でもどこにいるのかわかるのか？」
「凛に聞く」
「凛？ああ、あの草と一緒に拘束されている呪術師か」
「そうだ。私と藍は君を襲った後、凛と草を連れ、宮を出る。そして帝を探す」
「俺を襲うって…」
親友の言葉に警備隊長は苦笑する。
「だって、そうしないと君の地位があぶないだろう？君には宮でやってもらうことがあるから、拘束されたら困るんだ」
「そうだな」
「そ、そういうこと」
典はにっこりと笑うと手に気を込める。
「待て、ちょっと心の準備と言うものが…！」
そんな強の言葉は騒音によってかき消される。

ドオオオン！

音がして鉄格子が壊れ、警備隊長の体が吹き飛ぶ。
「強様？！」
その体は向かいの藍の牢の鉄格子を壊し、牢の壁に叩きつけられる。
「何事だ？！」
音を聞きつけ、牢屋の番人が降りて来る。

「典様…やりすぎです」
壁の近くで倒れこむ強が息をしていることを確認し、藍はほっとしながら師を睨む。
「そう？でもこれくらいやらないと信じてくれないだろう？」
しかし美しき宮の呪術司は優雅に笑うだけだった。

性格悪すぎ。
っていうか、もし強様が死んだらどうする気なんだろう。
この人……

「さあ、行くよ。藍」
典がぐしゃりと曲がった鉄格子を越え、牢屋から出る。
兵士たちが集まり始めていた。
「皆さん、大人しく逃げないと怪我しますよ！」
無駄だとわかっているが藍は兵士に向かってそう叫ぶ。

空によって、宮が変わろうとしていた。
無駄な犠牲は出したくない。

藍はそう思いながらも、手の平に気を込める。

「藍、手加減するんだよ」
「わかってます」
呪術司と弟子は気を高めると兵士に向かって飛んだ。

二

ざわざわと外が騒ぎ始めるのがわかった。
凜(リン)は牢屋の窓から外を見る。
兵士たちが慌ただしく、動く様子が見えた。

「凜様」
一緒に牢に入っている草(ソウ)が不安げだった。殺そうとした帝は消え、兵士によって拘束された。

帝をさらったのは空(クウ)だ。
凜はそう確信していた。
紺(コン)と闇の呪術師は帝が消えたとわかったとたん、姿を消した。

空はまさか自分が草と共に掴まるなんて予想もしてないだろう。
草を置いて、逃げることなんてできなかった。

空(クウ)は凜に黙って、この計画を立てたに違いない。
凜達が呪術司や警備隊長、そして女性呪術師の気を引いている間に、帝をさらう。

初めからその計画だったに違いない。
草を捨て駒にするつもりだった。

凜はその事実を考えると胸が締め付けられるようだった。

騙してきた草……。
本当は帝はただ麗と草の存在を知らなかっただけなのに、
草に帝が草達母子を切り捨てたとほのめかした。

その上、草を見殺しにする。
凛は出来なかった。
空がそれを望んでいたとしてもそれだけはできなかった。
「何者！？ぐわっつ」
牢番の声がそうして、二人の男女が現れる。
「お前らは！」
草が呪術司とその弟子の姿を見て声を荒げる。
「草くん、凛さん！説明は後でします。私達についてきてください！」
草の母親の姿の藍（ラン）がその緑色の瞳を凛に向ける。
「誰がお前らなんかと！」
「わかった。ついて行こう」
「凛様？！」
師匠の思わぬ言葉に草は目を剥く。
凛はこのまま牢にいても草は助からないと感じていた。それなら敵であったが、宮を離れる呪術司達についたほうが賢明だった。
グワンと音がして、牢屋の鉄格子が壊れる。
力を発したのは南の呪術師だった。
初めてみた凛の力に藍は胸が躍る。
「さ、行こうか」
「はい」
師匠にそう促され、草は頷く。藍達は嫌いだったが、少年は凛を信じ切っていた。

「呪術師達よ。典(テン)と藍(ラン)を宮から出してはならない」
新しく呪術司に就任したのは紺(コン)という男だった。見たこともない呪術師の姿に呪術部の者達は騒ぎ立てた。しかし、その騒ぎを止めたのは東の呪術師賢だった。

宮に異常な事態が発生していた。父である将軍の奇行とも言える政治的決断を異母弟と共に目の当たりにした。呪術司を拘束するように警備兵に命じ、帝の捜索をする様子も見せず、ただ空に従っていた。将軍の二人の息子たちは、下手に動くと拘束されると判断し、とりあえず将軍や新呪術司に大人しく従い、機会を窺うことにした。

「明ちゃん、行こう」
「賢様……」
戸惑う明の手を引き、東の呪術師は典達を追う。

紺より、警備隊長を襲い脱獄した元呪術司とその弟子を追うようにと指示が下された。
賢は率先してその指示を受け、動いた。

警備隊長と襲うって、典も派手にやるなあ。

胸中でそう思いながらも、賢は紺の手前表情を厳しくさせる。新呪術司のできる限り側にいて動向を探るつもりだった。

脱獄した四人の前に紺を先頭に数人の呪術師が立ちはだかる。

「凛…裏切るのか」
紺は空の愛人の姿を典の側に確認し、睨みつける。

「……」
「裏切るってなんだよ！」
凛の背後から草が顔を出し、紺を睨みつける。
「裏切ったのはそっちじゃないか！」
草を狙った気を凛が弾き飛ばす。
「草、後ろに下がってろ」
不服そうな草にそう命じ、凛が構えを取る。
宮を支配したとは言え、草にこのまま話させると面倒なことになると紺が考えているのがわかった。凛も草を助けるために脱獄したが、空の窮地に追い込むつもりはなかった。

「典、久々に戦う機会があってうれしいよ」
紺の側で東の呪術師が笑顔を浮かべる。典は弟の親友で同期の呪術師だ。稽古を一緒にしたことがあっても本気で戦ったことはなかった。
腕を試すいい機会だと賢は刀を抜く。
「賢さん……」
藍は昨日まで一緒に笑っていた賢が敵となり、師に刀を向けているのが信じられなかった。
「藍、ごめん。でも選択肢がないのよ」
そして先輩の呪術師がその青い瞳を曇らせて藍に対峙する。
「明様も…」
藍は仲間と戦うのが嫌だった。しかし、このまま牢屋に拘束されるのはごめんだった。
帝を宮に連れ戻し、元の宮に戻すんだ。
「明様。すみません」
藍は息を吐くと、気を高める。

「宮の呪術師よ。罪人を捕まえるのだ。抵抗した場合、殺しても構わん」
紺はそう言うと、長い刀を背後から抜き去り凛に切りかかる。それが合図となり、呪術師達は戦いを始めた。

「凛が……」
凛が典達と脱獄したという知らせはすぐに空に届いた。
「あら。空。氷の呪術師に裏切られて悲しいのかい？」
空にお酌をしていた闇の呪術師はその真紅の唇をゆがませて笑う。
「うん。悲しいとも。その代わり君が僕を慰めてくれるんだろう？」
「もちろんだよ。帝様」
ぐいっと自分の肩を抱いた空に桂（ケイ）が深く口付ける。
「桂。将軍の様子がどうなの？」
空は唇についた紅を手の甲でぬぐうと、杯を煽る。
「もう、あたいに夢中だよ。何かさせたいのかい？」
「今のところは十分だ。僕がもういいから、将軍のところへ行っておあげ。将軍は大切な人材だからね」
「ちぇ、わかってるよ。本当はおっさんよりあんたみたいに若い男を相手にするほうが楽しいんだけどねぇ～」
「そうだね。すべてが片付いたら十分楽しませてもらうよ」
くすっと空が笑うと桂がやれやれと体を起こす。
「じゃあ、しょうがないねぇ」
桂は名残惜しそうに現帝に口付けると立ち上がる。
「頼んだよ」
襖を開けて、部屋を出て行く将軍の情婦の背に目を向ける。部屋には主が消えたというのにその甘い残り香りが漂っていた。空は眉をひそめると持っていた杯を壁に投げつける。
パシンと杯が割れ、酒の香りが部屋に充満し、その香りを消し去

った。
「凛め……」
空はそうつぶやくと新しい杯に酒を注ぎ、一気に飲み干す。喉に痛みが走ったが、現帝はその痛みを無視して、飲み続けた。

三

「やっぱり私の負けだわ」
明（ミン）は悔しそうに自分の前に立つ後輩の呪術師を見上げる。
初めから敵わぬ相手だとわかっていた。宮の美しき呪術司の愛弟子と影で言われる藍（ラン）、姿が変化する前までは地味な娘でその力はうらやまれてもその性格や様相からねたみの対象になることはなかった。しかし、いまや呪術司を並んでも見劣りしない姿をしており、呪術部の女性の多くは藍をねたんでいた。
明は表立ったその思いを吐き出すことはなくても、同じ思いを抱えていた。しかし戦って見て、その思いは消えた。やはり藍の力は格別だった。
「明様。ごめんなさい」
藍は、肩で大きく息をして、自分を見つめる明はぺこりと頭を下げる。
魅惑の呪術師は自分の思いを知らず、素直に自分を慕う後輩に柔らかな笑みを向けた。

「草（ソウ）！」
凛（リン）は落ちていた刀を拾うと草に投げる。紺（コン）の腕はやはり一流で、南の呪術師は苦戦していた。弟子を庇う余裕はないほどだった。
しかし、賢（ケン）と明以外の呪術師はそれほど強くないことはわかっていた。武器を渡せば草1人でなんとか戦ってくれると願った。
凛は紺と対戦しながら弟子の様子を見る。
「凛。余裕だな」
新呪術司は笑みを浮かべると刀を振り下ろした。
ガチンと金属がぶつかり合う音がする。

紺の刀を受け止めたのは前任の呪術司だった。
紺がその背後に目を向けると気を失った賢の姿が見える。
「凛。一気にこの人を叩いて、逃げるよ」
典(テン)は驚いた顔をして自分を見ている凛に笑いかける。
「できるかな。宮の美しき呪術司よ」
「できますよ。新任の呪術司殿」
典は受け止めた刀を力いっぱい押し返す。
「凛。草は大丈夫だ。藍が援護する。私達はこの男を叩き、宮から逃げる。いいね？」
「……わかった」
紺は二人のやり取りを聞きながら、気を高める。
全力を出し切る時がきたと、心が躍っていた。
「かかって来い」
その声に金髪と白髪の美しき呪術師達は互いの顔を見合わせる。
そして刀に、拳に、気を込めると飛んだ。

「草くん！」
自分に襲いかかった気がふいに消滅した。それが母と同じ姿をもつ女性呪術師の仕業だとわかり、草は顔をゆがめる。
「助けなんかいらない！」
「あー素直じゃないんだから！」
藍は呆れた声をあげながらも、手の平に気を込め、元同僚たちに放つ。
「ごめん！急所ははずしてるから！」
「助けなんか必要ない！」
「ああ、もう！文句は宮から出てからよろしく。宮を出るのが最優

先だから」
草と背中合わせに立ちながら、藍は刀を構える。
「ほら、来るよ。宮の呪術師はそこらへんの呪術師とは違って強いんだからね！」
「わかってるよ」
ぶーと顔を膨らませてそう答え、少年は向かってくる呪術師に気を放った。

「これは俺の出番かなあ～」
宮の庭で繰り広げられる呪術師の戦いを楽しんで鑑賞していた呆（ホウ）が欠伸をする。お披露目の行列を襲った際に頭巾をかぶるのを忘れており、桂（ケイ）と共に表立った行動するのは避けるようにと釘を刺されていた。
しかし、戦いの状況は思わしくなかった。
「逃げたらまずいよな」
呆は懐から布を取り出すとぐるぐると顔にまく。
「これで正体はばれないと」
自分が影で猿男と呼ばれるゆえんを知らない闇の呪術師は意気揚々と木から飛び降りると戦場に向かった。

「琴（キン）、ごめん！」
藍は対面する呪術師の懐に入ると刀を翻し峰打ちを食らわせる。同期の男性呪術師は美しく変貌を遂げた元同僚に見とれながら、気を失った。すぐ側では草がこれまた同期の呪術師と戦っている様子がわかったが、少年の力を知っている藍は自分が助ける必要はないと、師を探す。
上空で師と南の呪術師が坊主頭の男と熾烈な戦いを繰り広げているのが見えた。

すごい、あの二人を相手に互角だ！

藍は全身が興奮のためぴりぴりしびれるのがわかった。そして戦いに参加したいと飛ぼうとした瞬間、何かが視界をよぎった。

「！？」

藍の頭上を飛び、降り立ったのは一人の男だった。

猿？いや人間だ。

着物も着てるし、草履も履いてる。

毛むくじゃらな手足が袖から、袴の下から出ているが人間のはずだ。

「お嬢さん。暇そうじゃねーか。俺が遊んでやろう」

猿男がそう言葉を放ち、藍は妙に安心する。

「どうしたんだ？俺が怖いか？」

自分を凝視する銀髪の呪術師に呆がニヤニヤと笑いかける。

「……怖いわけないでしょ。ただ人間だったんだなと思って」

「？！なんだと？！」

その言葉に闇の呪術師は一気に怒りを爆発させる。

昔から猿に似てるなどといわれてきたが、人間だったと言われたのは初めてだった。

「この女！ぶっ殺しやる！」

布に隠された顔から湯気が出ていると、想像ができるほど烈火の怒りをたぎらせた呆は、腰から小刀を抜くと藍に襲い掛かる。

「！」

しかし藍は慌てる様子もなく、刀を構える。

戦いは感情的になったほうが負けだ。

それは典から言われてきた言葉だった。感情的な藍はその言葉の意味がわからなかった。しかし、こうして怒りに我を忘れた呆の動きを見て、わかった。

隙がありすぎる。

だから感情的になっちゃだめなんだな。

藍は自分の勝利を確信しながら、呆に対峙した。

「……なかなか強いですね」

美しき宮の呪術司は南の呪術師と並んで、上空に浮いていた。対面にいるのは紺だ。黒国で一番の腕は自分だと思っていたが、この調子じゃニ番手に格下げだと典は冷静に思った。

しかし凛と二人では勝てない相手ではない。しかも自分たちの目的はこの男から逃げることだ。

典は凛と顔を見合わせる。

考えていることは一緒のようだった。

「どうした？終わりか？」

紺は刀を構え、二人の呪術師を睨む。さすがに腕の立つ二人相手で紺の息は上がっていた。

「呪術司殿！」

美しき呪術師達は同時に気を操り、竜巻を紺の周りに発生させる。

まともに戦うと時間がかかりすぎる。

用は紺の動きを止めることが大事だった。

「草！」

竜巻が紺の動きを止めている間に、南の呪術師は上空から弟子の名を呼び、その姿を探す。
「藍、行くよ！」
同じく美しき宮の呪術司は愛弟子と宮を脱出するために呼びかける。そして弟子がその力を使い呆を先頭不能に追い込んでる様子を発見し、満足げに笑った。
「さあ、行こう！」
典の言葉を合図に脱獄した四人が空を駆ける。

太陽が傾きかけていた。
天は四人に味方をしているようだった。
呪術師達はひとまず闇に紛れて宮から姿を消そうとしていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7596x/

呪われたもの

2011年11月30日22時50分発行